聖遺物の適合者と禁断の果実（リメイク版 10話から最新）

桐生 純

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この世界にはノイズが蔓延っていた。その裏側では生まれるはずのなかった「二つ目の果実」。「はじまり」とは違う「二番目」の果実。人を滅ぼそうとする「二番目」と人を護ろうとする受け継がれた「はじまり」の力。

これは、禁断の果実を受け継ぎ「はじまりの男」となった少年が奏者や世界の為に色々頑張る話である。

〈フルーツバスケット！〉

「変身！」

〈ロック！オープン！極アームズ〉

〈大！大！大！大！大将軍！〉

「ここからは俺のステージだ！」

前作「聖遺物の適合者と禁断の果実」のリメイク作品です。前作がミスを多発させてごちゃごちゃになったためのリメイクです。ところどころ改変しています。

注意：何をトチ狂ったのか風邪を引いて頭が重たくなっていたからかリメイク前を消すという暴挙に出ていました。ごめんなさい。第９話からが新だと思いますのでよろしくお願いします。

前作　ＵＡ７０５６

お気に入り登録７１

でした。

目次

プロローグ　奏の喪失 ―― 1
覚醒 ―― 5
目覚めの宴 ―― 11
過去　そして、今 ―― 17
絶望の少女 ―― 25
番外編　バレンタインデー ―― 35
新たな撃槍の目覚め ―― 44
再開 ―― 52
オーバーロードとの邂逅 ―― 62
神としての降臨 ―― 71
共闘 ―― 77
リディアン ―― 82
ネフィシタンの少女とオーバーマリス ―― 90
極 ―― 97
本音…そして… ―― 103
見舞い ―― 107

プロローグ　奏の喪失

「はぁはぁはぁ」
　荒く息をついている少女が居た。その少女がいた場所は何処かのドームだった。そして少女の回りには異形のものが大量に群がっていた。
「ちぃ、キリがねぇ」
「奏！」
　奏と呼ばれた少女は返事をして呼んだ少女の方へ駆けていく。
「翼！大丈夫か？」
「私は大丈夫だ。だが、あまりにもノイズの数が多すぎる」
　すると、奏が纏っている物が光を失っていく。
「クソッ！時限式だとここまでかよ！」
「どうする？奏？」
「そうだな。さてどう…！」
　ふと横を見ると逃げ遅れたと思われる少女がノイズに狙われていた。
「マズイッ！」
「奏!?」
　奏は、少女の前に飛び出して手に持っていた槍を高速で回転させ、砲弾の様に飛んでくるノイズを防いでいく。が、ノイズの猛攻を受けていた槍が破損し欠片が守っていた少女の胸に突き刺された。
「おい！大丈夫か！」
　奏は驚き、倒れた少女の方に駆け寄っていく。
「しっかりしろ！目を開けてくれ！生きるのを諦めるな！」
　だが、無情にもノイズは次から次へと出てくる。そのうえ、少女の方も限界が近づいていた。
　ジィィィィィィ
　不意に、チャックが開くような音が響いた。奏が音の発生源を探すとそれは正面にあった。正面に空中にチャックが開いている。そこから見えるのは不気味な森だった。森の木には見たこともない果実

が生っており、奏はその果実に対して猛烈な食欲が沸き出てきた。
（旨そうだ。旨そうだ。あれを食いたい。あれを食いたい。食いたい！）
その耐えがたい気持ちを気力で無理やり押さえ込む。
（ダメだ。ダメだ。ダメだ！）
すると、チャックの中の森から蔓がこちら側へと伸びてきた。
（なんだ？）
伸びてきた蔓に先ほど見た果実が生った。すると、ずっとこちらを狙っていたノイズ達が一斉に果実の方へと走っていく。そして、その果実を我先にと食べ始めた。この光景には見ていた奏と翼を含めてモニターで監視をしていた人達も驚いた。見ているとその内の一体が突然体を震わせたかと思うと、その姿が大きく変化した。その変化したノイズ達や森、チャックの名前は後にこう呼ばれる。
変化したノイズ達は『マリス』。森は『ディストピアの森』と。
因みに果実の名前は『ディストピアの実』チャックの名前は『クラック』と言う名前がつくことになる。
また、マリスにも位があり黒い体に赤い眼をして大きな手には爪がついている物は『初級マリス』
色とりどりの『初級マリス』と比べても圧倒的に力が強いものには『上級マリス』となる。
奏はそんな怪物共を見て震えそうになる足を堪えて覚悟を決めて立ち上がる。
すると、背後から翼に向かってマリスが襲いかかろうとしていた。
「翼！」
奏は走り翼に振り下ろされた爪を受け止める。が、上級マリスが口から撃った弾が奏の背中に直撃する。
「クッ！」
「奏!!」
その攻撃は確かにかすり傷程度のものだった。だが、
「大　丈　夫　だ。　こ　れ　く　ら　い　…。　グッ　…　グアあああああああああああああああああああああああ」

奏は叫び声をあげる。その攻撃を受けたところから植物が生えてきたのだ。壮絶な痛みと共に。その痛みに必死に耐えて奏は歌った。今に状況を打破するために。自らの命を犠牲にして。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ・・」
「奏!・歌ってはダメエエエエエエエエエエエエエエエエ!・」
歌い終えた奏は持っていたガングニールの武装である槍を天高く掲げる。そして奏は笑った。口からは血が溢れる。
「じゃあな」
奏の命の歌は確かに凄まじいものだった。何百匹いたマリスを半分ほど減らすことができた。だが、まだマリスは残っている。そこで、奏は倒れる。翼は、急いで倒れた奏の元に駆け寄る。
「奏・・」
「なぁ、知ってるか?・全力で歌を歌うとすっげー眠くなるみたいだぜ。」
「奏・・いやだよ・・また皆んなは私を一人にするの?・もう二度と私を一人にしないでよ・・」
「私は父親と母親をノイズに殺された・・ノイズ達に復讐しようとこの力を手に入れた・・けど、それも道半ば・・私の人生に意味なんてなかったのかな・・」
奏が力尽きるその瞬間にもマリス達は迫って来る。だが、神は見捨てなかった。
『そんな事ねぇよ・・お前・・すげぇ頑張ったじゃねぇか』
「誰⁉︎?・」
奏は、もう言葉を発する事ができないがそれでも目を動かして声のした方を見る。その声の方には光の果実が浮いていた。形を表現するなら金の林檎であろうか。マリス達はその光の果実に怯えるように向かって来ていた足を止める。その光の果実は奏と翼の前にゆっくりと降り立つ。翼がその光の果実をよく見ると中に薄っすらと人がいるように見えた。輪郭だけ見えるその人は、手をこちらに突き出す。すると、翼は物凄い勢いで後ろに飛んで行き壁に激突して止まった。

「グハッ・・」
その光の果実は翼を飛ばした後、奏を浮かせて光の球の中に取り込んでいく。
「何を・・」
翼は叫ぼうとするがダメージが大きすぎて話す事さえできない。奏を完全に取り込んだ後、光の果実はゆっくりと回転しマリス達に向けて光を放つ。すると、その光を浴びたマリス達は次々と爆発していく。やがて全てのマリスが居なくなったのを見届けると光の果実は、浮き空へと飛んで行った。それを見届けた翼は飛んで行った空へと手を伸ばしながら
「奏・・」
そう呟くと気を失っていった。

この『聖遺物の奏者と禁断の果実（改）』無印編は
「俺はある人からこの力を受け継いたんだ」
「それは、人が持っててい力じゃない」
「ガングニールだと‼?」
「あの光はあの時の・・」
「よくも奏をぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ」
「ここからは俺たちのステージだ！」
「この命も！拳も！シンフォギアだ！」
お楽しみに

覚醒

少女を飲み込んだ光の果実は姿を消して飛び去り、ある一つの建物の上にたどり着く。光の果実はそのまま降下して建物の中に入り込む。中に入った後、段々と少女を吐き出していく。そして、吐き出された少女を優しく布団の上に寝かせる。少女には絶唱を歌った様な怪我などが一切見当たらない。綺麗な金色の髪に染まり始めており、真っ白な服を着ている。

「体が馴染むまでざっと見、2年ってところか・・」

光の果実の正体であった青年が呟く。青年は手をかざしてクラックを出現させ、その中からカミキリインベスを呼び出し命令を下す。

「いいか。この人のことは種も植え付けてはいけないし傷つけてもいけない。目が醒めるまでキチンとお世話する事。いいな?」

カミキリインベスは頷く様な仕草をして鳴き声を上げる。

「じゃぁ頼んだよ」

そう言って青年は出て行く。溢れ出すノイズを殲滅するために。後にこの時の行動は二課にとって伝説となるのだがそれはまた後のお話で。

ーーーーー帰宅ーーーーーー

「ただいま・・って誰もいねぇけど」

そう言って入ると

「お帰りなさい!・マスター!・」

「へ・・」

そこには眠っている少女に良く似た少女が居た。その事に青年は驚き聞く。

「君は・・まさか!・」

自分の中の感じる繋がりから目の前の少女の正体が分かってしまった。

「はい!・行く前にマスターから命令を貰ったカミキリインベスです!・」

「マジ‥。何が起こった?」
　そう聞く青年の問いに答えた少女の言うことを簡略化すると、どうやらこういうことらしい。
「つまり、この子が持っていた聖遺物の欠片を食べちゃった。そうしたら、聖遺物の記憶が流れて込んで身体が変化したと。うーん。そんな事あるのか‥インベスの歴史で多分初だからな。聖遺物の欠片を果実と同じ様に見るなら進化の一端なんだろうが‥なんともいえねぇな。他の奴で試してみないと」
　青年はそこで考えるのを止め少女の方を向き言う。
「まぁ、女の子の方が面倒を見る面からしてもいいからこれからもこの子のお世話頼むよ。俺と苗字は同じでいいと思うから‥そうだな『葛葉　愛歌(アイカ)』愛の歌って書いて愛歌(アイカ)だ」
「愛歌‥いい名前だと思います。ありがとうございます。マスター!」
　青年は頭をかき少女‥いや愛歌に言う。
「マスターっての止めてくれないか。俺には『葛葉　憐』っていう名前があるんだ。お前はもう人間なんだから憐って呼んでくれないか」
　愛歌は首をかしげ問う。
「?‥それは命令ですか?」
「いいや、違う。お前はもう人間なんだ。俺と同じだよ。だから恋に対してはもう、命令はしない。だからね、俺は憐だ。憐」
「憐‥マスター‥」
「憐」
「‥れ‥憐‥」
「よく出来ました」
　そう言って憐は愛歌の頭を撫でる。撫でられている愛歌はテンパり顔を真っ赤に染めながら止める。
「あの///憐、憐ってば///マスター!」
　すると、呼び方がマスターに戻ってしまう。どうやらテンパると戻ってしまう様だ。
「じゃぁ、これからよろしくね」

「はい！よろしくお願いします！」

ーーーーー1年後ーーーーー

やぁ、読者のみんな二年後だと思った？残念、一年後でした。いや、俺も馴染むのが二年後になると思ったんだよ。そうしたら、一年で馴染み終わったんだよ。

これには、俺もビックリだよ・・・って、俺は誰に向かって何言ってんだ。

今、純の前では髪が金色に完全に染まった少女が起きようとしていた。

「うぁ・私は・一体・」

「起きたな」

「お目覚めおめでとうございます。姫様」

憐が声をかけ愛歌が膝を付く。

「誰だ・・！」

少女は警戒態勢を取る。それもそうだろう、目が醒めると知らない所で目の前に知らない男女が立っているんだから警戒するのも当然だろう。純は少女の警戒心に触れない様に話し掛ける。

「俺は葛葉憐。うーん。今は宇宙の神様だ」

「は・」

少女はあまりに拍子抜けした答えに警戒態勢を解いてしまう。

「おっ、警戒態勢解いてくれたな。じゃぁ、やり直し。俺は葛葉憐。ヘルヘイムの森の王。黄金の果実、別名、知恵の実、禁断の果実の保持者で神様だ」

「いや・神様って」

「神様って信じられない？」

「だって、急に神様だーって言われても・」

「分かってるんじゃないの？理屈じゃなく本能的にね。女神様」

そう、憐がこの少女が女神様になったとわかるように彼女もまた目の前にいる青年が本物だと分かるのだ。

「まぁ・な。体の中にある力・明らかに常軌を逸してる」
　憐は立ち上がり少女にヘルヘイムの森に行けるかと聞く。
「クラックを開いてヘルヘイムの森へと行けるか？」
　その言葉に少女は首を傾げ
「クラック？ヘルヘイムの森？何なんだそれは？」
「あれ・記憶の定着がうまくいっていないか。まぁ、いいか」
　そう言って憐は立ち上がり手を振る。すると、チャックが開いていきくうかんに裂け目が出来る。その中は薄暗い森が広がっていた。
「っ！・コレは！」
　そう、少女にとっては絶唱を歌わざる状況を作った物なのだから。警戒もする。実際には繋がっている所は違うのだが。
「ほら、行くよ」
　憐が手を伸ばすが少女は来ようとしない。不思議に思い聞くと。
「どうしたの？」
「どうしたもなにも！・これは中から化け物が出てくる穴じゃねぇか！お前らがやったのか⁉？・あの化物を生み出して私達を襲わせたのは！・そいつらから翼や女の子を守る為にあの絶唱（歌）を・・」
「それとは違うよ。二番目とは」
　憐はバッサリ切る。いやそんな事より
「二番目だと・・」
「それを含めて教えてやるよ」
　そう言って、憐は入って行ってしまう。
「あっ！・ちょ！・待てって！」
　しかし、憐はさっさと入り見えなくなる。残された少女は先程からずっと跪いている自分似の少女を見る。
「君は誰なんだ？」
「はっ！・私は姫様直属の部下にあたります。葛葉愛歌と申します。今までのご無礼お詫び申し上げます！・どうかお許しを！」
　あまりに仰々しい愛歌の反応に困惑して問う。
「ちょ！・顔上げてくれ！・何をしたんだ？」
「はっ！・姫様がお眠りになられている間私がお世話をしていたのです

が、その間に姫様のその・・スリーサイズなどを勝手に調べ衣服を買い、服を脱がせ体を拭いていたことです。女性にとってスリーサイズを勝手に知られたり、身体を見られたりするのは失礼に値することだと聞きましたのでお許しを・・」
　何かと思えばそんな事なので少女は恋の頭を撫で言う。
「何だそんな事か。仕方なかったんだろ。なら、許すさ。当たり前だろ」
「ありがとうございます！」
「そんな仰々しくなくていいよ」
「しかし、私は姫様の従者ですし・・」
「奏だ。天羽奏。それが私の名前だ。私達は対等だ。人間同士な」
　奏がそこまで話していると開きっぱなしだったクラックから羽の生えた初級インベスが飛んでくる。1年前のライブの時に襲ってきたやつと似ていた為に、奏は咄嗟にギアを纏おうとするが胸にかけていたペンダントが無くなっているのに気づいた。
「おい！愛歌！私のペンダントはどこだ！」
　しかし、愛歌はインベスの方に歩み寄り耳をかざす。
「成る程。奏様。憐の用意が出来たようです。私たちも向かいましょう」
「おい！ペンダントは！」
「それを含めて憐・いえ、王からお話があります。いらっしゃってください」
　有無を言わせない愛歌の言葉に奏は素直に頷く。
「はぁー行くよ」
「それは良かった。じゃ、行きましょう。奏」
　奏は、愛歌の口調がコロコロと変わるのを聞いてどれが本当の愛歌の口調か分からなかった。
「ここなのか？」
「ええ、ここで憐がまってるはず」
　奏は緊張しながらクラックの先にある森の奥深くにあった遺跡の

内のひとつの扉を開ける。
パーン
「へ？」
「ようこそ！ヘルヘイムの森へ！」
そこにあったのは『奏！覚醒おめでとう！』と書かれた掛札と沢山の見たことのない果物だった。中央に憐が居てその横には最上級インベスが並んでいた。

目覚めの宴

「ようこそ！ヘルヘイムの森へ！」
　クラッカーの音と共に頭に降り掛かる紙吹雪を取ろうともせず立ち尽くす。愛歌は立ち尽くす奏の背中を押し憐のそばに行く事を伝える。奏が歩き出すと5体の最上級インベス達が横に並び膝を付く。奏が憐の横に行くと純は移動して遺跡の一番高い所へ行き、下に見える大量のインベスを見て手を広げヘルヘイムの森の果実がなる蔓をインベスの上に伸ばしていき宣言する。
「今！果実の選定者が蘇った！今夜は無礼講だ！皆の者！最上級から下級まで全ての者の上下関係などない！思う存分喰らえ！楽しめ！ただし！争いごとは無しだ！いいな！」
　すると、下の全インベスから歓声が上がる。その光景に奏は圧倒される。何せこの下には何万とインベスがいるのだ。初めて見たものには圧巻だろう。
「俺達は中で食べようか」
　そう言って憐は手を差し出す。奏は差し出された手を取り中へ入って行く。中では最上級インベス達が一斉に食事をしていた。下級や上級とは違いキチンと食べていた。その内の一体が憐と奏に気付き近くにやってくる。
「@&#／@#@／#@#&」
「そうか。だが、今夜は無礼講だぞ」
「#／&#@＿#」
　その一体は奏の方を向き話し掛ける。
「#／&#&a／##&@&#／」
　しかし、奏には何を言っているかが分からない。憐の方を向き聞く。
「こいつは何を言っているんだ？」
　そうすると、憐は頭を掻き
「あれ？分からない？んー私には分かると思って聞いてみな。すまない。もう一度言ってやってくれるか？」

憐の言葉にインベスは頷き繰り返す。
「#／&#&a／##&@&#／」
奏は何を言っているか分からないはずだった。だが、分かると思って聞くと確かにこう言っていた。
「#／&#&a／##&@&#／（お目覚めお祝いいたします。姫様）」
「あっ・・ああ。ありがとう」
一度分かると思ったら後は簡単だった。
「私だけではありませんよ。ほら、次々ときますよ。姫様の目覚めをみんな待っていたんですから」
見ると、こちらに気付いたインベス達が一斉に奏に向かって来ていた。
「姫様！」
「お目覚めおめでとうございます！姫様！」
「おめでとうございます！姫様！」
「おめでとう！お姫様！」
そこで憐が最上級インベスを見て奏に話す。
「こいつらはインベスの中でも高度な知恵のある最上級インベス『オーバーロード』だ。ちゃんと名前もあるぞ。右から『シェスザム』『ローズ』『アリゼンド』『マキシム』。後一人いるんだが下の奴らの面倒見に行ってくれてる」
「なるほど・・」
奏は異形のオーバーロード達を見ながら恐る恐る聞く。
「お前らは、王に力で従っているのか？」
すると、オーバーロード達は笑って答える。
「いいえ、私達は王に純粋な気持ちで従っております」
そう、シェスザムが答え
「誰かは最初は認めるかーって怒って勝負挑んでボコボコにされたけどね」
ローズが笑い
「古い傷だ。掘り返すな」

マキシムが苦笑し
「まぁ、あれがあったからオレ達も王に従うことにしたがな」
アリゼンドが答える。
「人望があるんだな」
奏がそう言うと
「まさか！紘太さんが凄かっただけだよ」
憐が笑って答える。
「それより、選定者は戦闘能力は皆無なんだからちゃんと守護すること。いいね」
「「「「はい。王よ」」」」
そこで扉が開かれ一体のオーバーロードが駆け込んでくる。
「王様！」
「ん、どうした？サクラ」
「下の者達が王様も一緒に騒ごうって煩くて・・」
そこでサクラは奏に気付き膝を付く。
「姫様！お目覚めおめでとうございます！」
「ありがとう」
ここまでいくと流石になれたのか淀みなく返す。
「で、サクラ。下級インベス達が俺も一緒にって言ってるのか？」
「はい。ですが行く必要はないかと・・」
「何言ってんだ。下の言うことも聞けなくて上に立てるか」
「ハッ！」
そこまで言うと奏をお姫様抱っこすると駆け出す。
「お前らもついて来い！」
「「「「「ハッ！」」」」」
「ちょ！下ろせ！」
しかし、憐は先程からの扉から飛び降りる。
「キァァァァァァ！」
奏は悲鳴をあげるが純は落ち着いてインベスのいない所へ轟音を上げて着地する。その轟音にインベス達はこちらを見る。その後ろにオーバーロード達も着地していく。

「来たぞ！・お前ら！」
　憐の言葉にインベス達が一斉に歓声を上げて迎える。憐は奏を下ろし手を引きながらインベス達の方へ行く。インベス達は果実を憐達に差し出しながら声を上げる。それはそれは嬉しそうに。憐は貰った果実を食べながらインベス達に声を掛け歩く。それを見た奏はある欲求が浮かび上がってくる。それは、
「なぁ、憐」
　その言葉に憐は振り返り嬉しそうに笑いながら
「やっと名前で呼んでくれたな。それで？何かしたいのか？」
「歌が・・歌が歌いたい。こんなに大勢の人っていって良いのか分からないけど人が居るんだから私の歌を聴いて欲しい・・」
「おう！・良いぜ！・聞いてたな！・お前ら！」
「はい！」
「オーバーロード達はマイクなどの設備、インベス達の列などを整えろ！・1時間でだ」
「「「「ハッ！」」」」
　ーーーーー1時間後ーーーーー
　そこにはライブ会場が出来上がっていた。ライブ衣装に着替えた奏は（えっ？・どうやって着替えたかって？・やだなぁ、そんなの神様の力に決まってるじゃないですか）ライブの裏側で出番を待っていた。そこに憐がやって来た。
「緊張してるのか？・」
　奏は憐の方を見ると何故か憐もライブ衣装に着替えていた。
「なんで憐まで着替えているんだ？・」
「俺も出るんだと」
「本当に⁉？・でも、ライブ出来るのか？・」
　そこで憐はニタリと笑って言い放つ。
「宇宙の神様舐めんなよ」
「王様！・姫様！・準備ができました！・」
　サクラがそう言いに来る。
「「おう（ああ）！・今行く！・」」

ステージに立った二人は歌い始める。一曲目は『逆光のフリューゲル』
「「☒～」」
歌い終えると彼方此方から歓声が轟く。
「次は俺だ！Ｒｉｓｅ　ｕｐ　ｙｏｕｒ　ｆｌａｇ！」
憐は手を打ち鳴らせ叫ぶ。
「ここからは俺のステージだ！」
それを聞いた奏は叫び返す。
「いいや！私たちのステージだ！」
ライブ終了後
「やるじゃん」
「当たり前だ。こちらとて神様だぞ」
「神様関係ない気がするけど・・まぁいい。説明してもらえるよな」
「ああ、その為には愛歌呼ばないと」
「誰かいるか？」
憐が聞くとサクラがでてきた。
「ここに」
「サクラ。愛歌を1時間後俺の部屋に呼んでくれ。頼んだ」
「御意に」
「奏は付いてきて」
「ああ」
そう言って二人は一つの方向へ向かっていく。
自分の部屋に着いた二人は部屋にある椅子に座り話し始める。
「改めて自己紹介だ。俺は葛葉憐」
そこで手から手の平サイズの光り輝く金の果実を出現させる。
「この黄金の果実の保持者で宇宙の神様だ」
「私は天羽奏。ツヴァイウィングの片翼でシンフォギア『ガングニール』の適合者だ」
そこで憐は奏に聞く。
「ツヴァイウィング？」
その問いに奏は驚く。

「知らないのか⁉?・自分で言うのもなんだけど結構有名だったぞ。私達」
「ごめん。その頃は恐らくこの世界で禁断の果実の適合してる最中だったと思う。それより私達?」
「ツヴァイウィングは両翼揃ってツヴァイウィングだからな。もう一人の相棒の名前は『風鳴翼』」
「!!」
その名前に憐は驚く。そして、奏に一つだけ聞く。
「奏・・その子は笑ってたか?」
奏はその質問に怪訝になりながらも答える。
「ああ、笑ってたと思うよ」
「そうか・・」
それを聞いた憐はホッとした顔をする。奏はそういえばと、一つのことを思い出す。
「でも、一年で2日だけ仕事を一切しない日があったな。聞くと大切な日とだけ言っていたけど・・」
その言葉に明らかに憐は狼狽する。
「何日だ!その日はいつだ?まさかとは思うけど・・4月2日と9月23日じゃないだろうな・・」
その言葉に奏は疑問を抱きながら答える。
「そうだけど・・なんで知ってるんだ?」
「この日は俺の誕生日と人である俺が死んだ日だ・・」
「どういうことだ?」
「説明するといったな・・俺の過去だ・・」

過去　そして、今

「説明するといったな・俺の過去だ・」

ーーーーー憐回想ーーーーー

俺は子供の頃はただの人間だったんだ。神の力なんで持たないどこにでもいる普通の家族。そんな俺には自慢できる幼馴染がいた。名前は風鳴翼。そう、お前の相棒である翼だよ。小さい頃から一緒にいてずっと一緒にいると思ってた。よく家に遊びに来てたんだよ。でも、小学生高学年頃から翼は俺と居る時間が少なくなった。今思えば奏者としての役目を果たそうとしてんだろう。そんな時俺の親が亡くなった。ノイズによる自然災害だよ。その時には翼ん家にお世話になりだしたんだ。翼って家事全然ダメだろ。ハッハッハ、やっぱりまだ治ってないのか。で、あいつの飯俺が作ったりとかな。洗濯とか自分でしろよな男の俺に何させてんだか。・・・・そして、中学生になった時決定的な事が起こった。久し振りに翼も一緒に旅行に行ったんだ。

「楽しみだな！翼！」

「そうね。憐」

「今回はアイドルとしての仕事もないんだろ。めいいっぱい遊ぼうな！」

「勿論よ！」

そこで翼の叔父である風鳴源十郎が二人に声を掛けたんだ。

「憐君。翼。森で枯れ木を拾って来てくれないか」

俺たちは快諾して探しに行ったんだ。森の中でもう十分だ。さて、帰ろうとした時の事だった。

「そろそろ帰ろうか」

「そうね。もう十分だと思うわ」

その瞬間俺の目の前の木が炭化した。

「っ！」

「ノイズか！」
そこで俺は翼だけでも生きて返そうと思った。もし、あの時シンフォギアという存在を知っていたとしても、女の子には戦わせない。そう思うよ。まぁ、その時はシンフォギアなんて知らなかったけど。
「逃げろ！翼！」
「なんで憐は！」
「後で行くから！・・ありがとう・・翼・・」
「一人にしないで！憐！憐！行かないでよ！」
その言葉を無視して俺はノイズが引きつけて走る。
「アァァァァ！」
俺の後ろでノイズが木に当たり炭化していく音が聞こえていた。その時に俺の右腕をノイズが掠っていったんだ。勿論、俺の右腕は炭化し始める。そして、俺は走る限界になった。木の幹にもたれ掛かり後ろから忍び寄るノイズを待っていたんだ。最後に俺は祈った。
「神様・・もし、生まれ変わる事ができたら今度は幼馴染の事を守れるくらいの力をください・・」
でも、その時俺はその幼馴染のことを思い出した。その幼馴染とした約束も。
「翼・・助かったかな・・翼・・そうだ・・そうだ！俺は翼に帰るって生きて帰るって約束したんだ！こんな所で死んでたまるか！神様！さっきの祈りは無しだ！俺は生きなきゃならない！生きて翼に言うんだ『ただいま』って！だから！そのための力を寄越せぇぇぇぇ！」
『ああ！よく言った！』
そんな時に声が聞こえたんだ。それがこの果実の先代の保持者『葛葉紘太』さんだ。彼はノイズを一掃すると俺の方を向きこう言った。
「力を欲したな・・なんでだ？」
俺は炭化していく腕を押さえながら言ってやる。
「翼との約束を守るためだをその為なら人間だって捨ててやる！俺は帰るんだ！」
「よく言った！上等だ。来いよ。力を渡してやる」
その事共に紘太さんは俺の人形を作り炭化させていく。

「これで人間のお前は死んだ・・お前の名前は？」
「葛葉憐・・」
その言葉に紘太さんは一番驚き言う。
「ハッハハハハ。同じ名前だな。俺は葛葉紘太。宜しくな」
俺はその差し出された手を取り立ち上がる。紘太さんはクラックを開き中に入っていく。俺はその後を追いかける。その時俺は一度も振り返らなかった。振り返ると決意が揺るぎそうだったからな。
そうして、俺は禁断の果実の継承候補者となった。
クラックが閉まった後シンフォギアを纏った翼がこの場にやってきた。そこには炭化しきり残りは徐々に炭化していく腕だけだった。翼はその腕を持ち上げ炭化していくのを見つめていた。炭化しきり跡形も無くなった炭だった。その腕だった炭を抱き留めると泣いた。大きな声をあげ森中に響き渡る慟哭をあげた。翼は力を求めて行動した。奏と出会うまでは。

「それで、その紘太さんに連れられてからは何があったんだ？」
「んー色々あったな。行った先でこれを渡されて」
そう言って取り出したのはベルトのバックルのようなものだった。
「それは？」
「これは戦国ドライバー。紘太さん達が元居た世界であったアーマードライダーが使ってた変身道具だそうだ。もっとも、これは俺ら果実の保持者用に変化しているけどな。で、これがロックシード。この森に生える果実を人間が安全に使用できる為に変化させたものだ」
そう言って次に取り出したのは果物の絵が施された大量の南京錠だった。外観は本体部・シーリングボディに、種類問わず形状・機構が同一の掛け金・スライドシャックルを持っている。
「これがＤ級ロックシード。ヒマワリロックシードがそれにあたるな」
そう言ってヒマワリの種の様な柄のロックシードを指差す。
「次にＣ級ロックシード。これはマツボックリとクルミ。まぁ、クルミはＣ＋だけど」

「B級ロックシード。ドングリだな」
「そして、A級ロックシード。俺が変身に使えるロックシードだな。オレンジを筆頭にバナナ、ブドウ、メロン、スイカにイチゴその他もろもろがA級ロックシードだ」
「これは？」
　そう言って奏は一番端に置かれた堅牢そうな本体部・シーリングドラムと掛け金・リファインシャックルが水色のクリアパーツとなっている外観が特徴のロックシードを指差す。
「それはエナジーロックシード。クラスはS級で、他のロックシードより数段上の力を秘めているロックシードだ」
「ふーん。で、最後の二つは？」
　奏が指差したのはロックシードの中で最も異質な形をした二つだった。
「それはカチドキロックシードと極ロックシード。極ロックシードは果実の力の一部で精製されたロックシードだ」
「成る程・なぁ紘太さんはどんな人だったんだ？」
　奏がそう聞くと憐は少し顔を俯かせ答える。
「誰も優しい人だよ。そして・俺が殺した・」
「エッ⁉？」
「着いて行ったあとの事だ・」

　着いて行った後
「憐にはこれを渡そう」
　そう言って俺には渡したのが戦国ドライバーだった。その時一緒に貰ったのがオレンジロックシードだった。
「これを使って人間界を襲おうとするインベスやマリスを倒して欲しい」
「分かった」
　そうして俺はこの世界の旅に出た。この地球を回っているうちにオーバーロードにも出会った。
「呼んだ？憐」

現実では部屋に愛歌が入ってきた。
「来たか。愛歌」
「憐。何の用？」
「愛歌。あれを奏に話してあげて」
「了解♪」
そこで愛歌は奏の方を向き膝を付き言う。
「私は姫様の直属の配下になります。カミキリインベスで・姫様の所有物であるガングニールです」
その言葉に奏は驚く。
「ガングニールだと！」
「ええ、姫様。ガングニールの聖詠を歌ってみてください」
「ああ・Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ」
そこで愛歌の身体が光り輝き始め一瞬の内に奏に装着される。いつもの様なガングニールの衣装ではなく、ＸＤモードのガングニールにオレンジ色の陣羽織を羽織り頭には鎧武と同じ冠が付いていた。
「どうして・ＬｉＮＫＥＲもないのに・」
その疑問には憐が答える。
「それはガングニールと愛歌が融合して二人が奏を認めているからだよ。適合係数は９０％位か・絶唱連発可能な領域だな」
『憐。私もいるよ』
奏の羽織る陣羽織から声が聞こえてきた。勿論恋歌の声だ。
「わ！愛歌か・」
「意識はあると・愛歌のアームドギアはあるのか？」
『いや、私はこのシンフォギアの一部という扱いみたいだね』
「ギアの操作はできるか？」
『それも無理みたい』
「なぁ憐」
そこで奏が声を掛けてきた。
「どうした？」
「アームドギアが出せない・」

「愛歌出せるか？」
　憐がそう聞くと奏の手の部分のアーマーが合わさりガングニールが飛び出してきた。奏はそれを掴むと一振りする。
「私の槍だ・・」
「という事は愛歌はガングニールを出せるのか」
『あと、背後が見えるから奏に警告することができるかな』
「成る程・・って！話は⁉？」
　ガングニールを解除して愛歌と分離した奏のその言葉に憐は溜息を吐き
「覚えていたか・話さなきゃダメか？」
　その言葉に奏は頷く。憐は
「簡単にでいいか？・・・この森は次の果実の適合者を探し出すのに闘争を望む。ただ受け継ぐのでは力を発揮しない。戦って受け継ぐしか方法がない。あとは分かるな」
　たったそれだけの言葉だったが言いたい事は分かったので奏はそれ以上は追求しなかった。
「さぁ何か聞きたい事はあるか？」
　奏は少し考え不思議に思っていたことを聞く。
「その力はなにが出来るんだ？」
「ええっと、森の操作とインベスへの命令にクラックの自由解放、時戻り、統一言語が話せるかな」
「ちなみにインベスの総数は？」
「六十億」
「一人が持っていい力じゃねぇ」
「まぁ、過ぎた力だとは思うけど、この力で戦えるのならそれでいい」
　そこで奏はもう一つ質問をする
「二番目って何だ？」
「‼？」
　憐はその言葉に明らかに反応する。そして、纏っていた雰囲気をガラリと変え話し始めた。
「俺の持つ果実の力の本質は『始まり』なんだ。人間が人としての営み

を始めた最初の人間。それが俺とおまえだ。始まりがあれば次がある。生まれるはずのなかった『二番目』それが奏達を襲った正体だ。俺はその保有者を探してるんだが全然見つからない」
「という事は、このノイズの一件も」
「恐らく、二番目の存在を知らしめるためにノイズ達と共闘して襲ったんだろう。或いは・・同一人物か・・」
「名前はあるのか？」
「名前は二番目の森の名前が『ディストピアの森』俺たちで言うインベスが『マリス』って名前だ」
「『マリス』・・悪意か」
「それと悪いが奏が生きている事を翼達には伝えられないと言うより伝えてはいけない」
「なんでだよ！」
「考えてもみろ。俺達が何が出来るのか。やろうと思えば世界を一瞬で廃墟に変えれる上に死んだ人間も生き返らせる事が出来るんだ。そんな力をわざわざ教えてやる必要もない」
「でも・・」
「だが！夢としてなら可能だ。夢はあくまで夢だからな」
「ありがとう」
「俺も出来れば関わりたくないんだが無理だな・・」
「どうしてだ？」
「奏が眠っている間世界のあちこちでノイズ倒したりマリス倒したりしてるから。バレてんだよな。ノイズを倒している人が居るって。まぁ、果実の正体も力もバレてないからなんとかなるだろ」
「軽いな。おい！」
　そこまで話したところでローズが急いで扉を開けて入ってくる。
「王様！」
「どうした？」
「人間がこの森に居ました！」
「何⁉？それでどうしてる⁉？」
「幸い果実を口にする前でしたから人間のままでいまシェムザムが見

ています」
「すぐに行く！案内しろ！」
「ハッ！」
そうして、慌てて二人は出て行く。それを見た奏は我に返って追いかけることにした。

絶望の少女

部屋に着くとインベス達に囲まれているが怯えずにただ死んだ目をしている少女が座っていた。憐はそこまで歩みを進める。すると、モーゼの如くインベス達が割れて膝を付く。だが、シェムザムだけは少女の横で膝を付く

「どうだ？シェムザム」

「ハッ！絶望をした様な死んだ目をするばかりです」

「話しかけたか？」

「私は可能ですが、私以外のオーバーロードは日本語は喋れません」

「そうか・・今すぐに覚えさせられるか？」

「可能です」

「では、他のオーバーロード達にも覚えて来いと伝えろ。これから必要になるかもしれないからな」

「御意に」

シェムザムはそう言って出て行く。憐はそのままインベス達にも出る様に命ずる。インベス達が出て行ったのを見届けると憐は少女に近寄る。

「私を殺してくれないんですか？」

死んだ目のまま少女が憐に聞く。憐は頷き答える。

「ああ、生きるのを諦めるな」

「生きるのを諦めるなですか・・諦めなかった結果が一年前のライブでの惨劇から私が生き残ったことによる他の人達の嫉妬、妬み、それによる嫌がらせ。そして、父の失踪・・・私は生きていてよかったんですか？」

「君名前は？」

少女は何故そんな事を聞くのかと思いながらも答える。、

「名前？名前は立花響です」

「よし、響。助けてやる」

「え？」

ようやく顔の上げた響に満面の笑みを浮かべて誓う。

「俺はお前を助けてやる。その絶望をひっくり返してやるよ。だからな、辛い時は言え。『たすけて』って。神は・・俺は絶対に助ける」
　響は憐の言葉に死んでいた心が生き返るのを感じていた。そして、どこの誰かもわからない憐に求めていた。
「助けてください・・私達を助けてください！」
「おう、任せろ」
　そう言った憐は響に家を聞いた後オーバーロード達に人が住める様に家を作ることとインベス達に響達を襲わない様に言い聞かせる様に命令を下した。
「取り敢えず、響の母さん達を迎えに行かなきゃ。そして、三人用の量産型の戦国ドライバーを用意してっと」
　クラックを開き憐は人間だった頃の姿に戻り立花家に行く。
「ここか・・けどこれは・・」
　そこにあったのは窓ガラスが悲惨に割られていて塀には『人殺し』の三文字。それが大量に書かれていた。その様子に憐は怒る。
「なんでだよ・・お前らは俺達とは違う。同じ人間だろうが・・」
　怒りを抑え憐は立花家のインターホンを押す。すると、怯えて出てきた女性が居た。
「何の用でしょう」
　今まで嫌がらせの電話など心にストレスを蓄えていたのか大分やつれていた。その姿を見て怒りが込み上げてきて抑えが利かなくなりそうになるのを気合いで抑え出来るだけの笑顔を作り聞く。
「貴女が立花響さんのお母さんですか？」
　響の母親は憐の笑顔に逆に怯えたようになり首肯する。
「ええ、そうですか。ですが、お金はもうありませんのでお引き取り願いますか？」
　それを聞き憐は慌てて訂正する。
「ちがいます！・俺は立花響の貴女達を助けて欲しいって言う願いでここに来ました」
「響の？」
「ええ、だから話を聞いてもらえませんか？」

「・・入ってください」
　案内されたのは暗くボロボロになったリビングだった。響の母親はテーブルの椅子に腰掛ける。
「貴方もそこに座りなさい」
「ありがとうございます」
　そう言って憐は響の母親の前に座る。
「話って何かしら？」
「はい。響さんは現在こちらの世界で保護しています」
「こちらの世界？」
「はい。僕が管理している世界です。この世界のすぐ側にあるもう一つの世界です。僕はそこで王をしています」
「王様・・」
「ええ、そして一応この世界の神様やっています」
「神様・・」
「うん臭いですよね。ですので、その証拠の一端としてこれだけ」
　そう言って憐はクラックを開き中から蔓を伸ばして自由に操ってみせる。そのまま蔓をこの家の周りに張り巡らしていく。
「何してるの⁉？」
「すみません。ですが、今一番安全なのは僕の世界です。ほとぼりが冷めるまで僕の世界に避難してください。勿論、この世界に戻りたい時は僕らに言ってもらえれば戻れますし、居場所も提供します」
「何故そこまでしてくれるの？」
「そうですね・・響さんの頼みだからでしょうか。でも一番は、あの事件の一端だった僕の贖罪です。あの後僕はあの事件の事を放置し世界中のノイズを倒していて気にも留めなかった。僕の不甲斐なさゆえです。神になったにも関わらずその事を放置していた自分に対するね」
「よくわかりました。贖罪というのなら納得しましょう。因みにもし、善意などと言うものなら信頼するつもりはありませんでした」
「それは手厳しい」
　そうして、二人は手を握った。

「僕達は必ず貴女達を守ります」
「信じましょう。その言葉を」
二人は手を離し、家の片付けに入った。
「では、衣類とどうしても持ち出したいものだけ選んで下さい。量が多くなるようでしたら僕達が手伝います」
そこで憐はクラックを開き中から何体か下級インベスを呼び出す。
「キャ！」
初めて見るインベスに母親は驚くが憐は安心させるように
「大丈夫です。こいつ達が僕の世界の住人です。こいつ達には貴女達を襲わない様に命令していますので安心してください。お前ら、挨拶」
憐がそう言うとインベス達は下手くそながらお辞儀をした。その光景に響の母親は笑ってしまう。
「フフフ。人間と変わりませんね」
「ええ、立派な奴らですよ」
憐に褒められたからかインベス達は全員俯いてしまう。響の母親はその余りに人間味のある光景にまた笑ってしまう。
「持っていくものはそこのタンスの中の衣類とこれだけで結構です」
そう言って見せたのは家族で映った写真だった。
「わかりました。では、行きましょう。お前ら、頼むぞ」
インベス達は返事をしてタンスを持ち上げクラックの中に運んでいく。
「じゃあ、行きましょうか。ついてきてください」
「あの・・私の母は・・？」
「今、部下の方に迎えに行ってもらってます。行く先にいると思いますよ」
「そうですか・・有り難うございます・・」
二人はクラックを通り憐の住処である遺跡に向かう。その庭には木で作った家が建てられていた。
「おおー速いな。流石だ。シェムザム」
「お褒めに預かり光栄です。我が王よ」

いつの間にかシェムザムが憐の横に現れて膝をついていた。
「響は？」
「失礼ですが王よ。響とは？」
「あの少女だよ。今日保護した」
「でしたら、姫様と居るでしょう」
「そうか、連れて来てくれるか」
「わかりました」
そこまで話すと憐は響の母親の方を向き家に入る様に促す。家は簡易ながら水道や電気、ガスまで通っていた。響の母親はそのライフラインを見ながら呟く。
「これ、どうやって通しているのかしら？」
その疑問に憐が答える。
「水道は人間世界の技術を使ってこの世界に流れる川をろ過して消毒して使っています。電気はこの森に自生している果実を使って発電機を作りました。ガスも果実を応用して作ったのです。勿論、お風呂も完備です」
「凄いわね。あなた」
「いいえ、凄いのは僕じゃなくてインベス達ですよ。僕はただ命じているだけにすぎません。そこにお掛けになってお待ち下さい。すぐに来ると思います」
そこに扉が開いて高齢だが若さに溢れた女性がサクラに連れられ入ってきた。響の祖母である。
「お母さん！」
「あら、あんた無事だったかい！」
「ええ、この人達が助けてくれたの・・」
「そうかい。ありがとよ・・」
「いいえ、それなら響に言ってあげてください。私たちに助けを求めたのは響ですから」
そこまで話すと、再び扉が開き響と奏が入って来る。響は自らの母と祖母を見ると嬉しそうに抱き着く。
「お母さん！おばあちゃん！」

「「響！」」
　それを見ながら憐は奏と話す。
「ありがとう。奏」
「気にすんなって。響は私が守りきれなかった子だからな」
　そして、響達は憐達の方を向き頭をさげる。
「私達を助けていただいてありがとうございました」
「ありがとうございました！」
「気にしないでください。僕の不甲斐なさゆえですから」
「それでもありがとうございます」
　頭をさげる三人に向かって取り出した量産型戦国ドライバーを差し出す。
「憐さん。これは？」
「量産型戦国ドライバーです。この森には果実が自生していると言いましたが、人がそれを食べると理性を失いインベス化する危険な果実ですので、それを防ぐためにもこの戦国ドライバーをつけて頂きます」
「「・・」」
　インベス化するという話を聞いて絶句する二人。
「因みにこれ付けてるとどうなるんですか？」
「取り敢えず、付けてもらっていいですか。それを腰に当てるだけですので」
　響達は言われた通り戦国ドライバーを腰に当てるとベルトが伸びて腰に巻きつく。それを確認した後に果実のなった蔓を呼び出す。
「これがその果実です」
　そう言って憐は果実を一つもぎ取る。しかし、何も変わらずに果実があるだけだ。
「響。これを一つ取ってくれないか」
　響は憐に言われた通りに一つもぎ取る。
「うん・・って言っても果実があるだけじゃあ・・違う！」
　そう、果実が変化してロックシードに変わったのだ。
「これって・・ヒマワリの種？」

そう呟くと唐突に憐が響に向かって
「ところで、響。お腹空いてないか?」
と聞く。響は恥ずかしそうに俯いて頷く。
「はい、実は結構・・」
「響・・」
響の母がたしなめるように言うが憐は笑って
「構いませんよ。じゃあ、そのヒマワリロックシードを解錠してベルトにはめ込んでロックしてご覧」
言われた通り、響はヒマワリロックシードを解錠しベルトに、はめ込んでロックする。すると
「あ・・お腹が一杯になってきた・・」
「嘘・・」
これには流石の奏も驚いたのか呟きを漏らす。
「これが、この量産型戦国ドライバーの力です。果実が放つ異様な食欲の誘発をなくし、試作型の様に変身機能は付いていないけど果実の余りある力を変換してエネルギーとして送り込むんだ。勿論、副作用なし!」
「やっぱり、凄いわね。この世界」
「でも、やっぱり食べる事も重要ですのでちゃんと食べないといけませんがね」
そこて奏が聞く。
「その金、どうすんだよ?」
その言葉に憐は笑顔で
「パチる」
「急に悪党になりやがった!」
ゴン!
憐は奏にツッコミと同時に拳を貰い吹き飛ぶ。吹き飛んだ憐は立ち上がりながら
「イテテ、あれだよ。パチるって言っても世界で悪い事してるマフィヤとか政府とかから少し貰うだけだよ」
「いや・それでもダメなんじゃぁ・」

それに響が咎めるが奏は
「ならよし！」
「いいのかよ！」
響が許した奏にツッコむ。ボケがツッコミに変わった瞬間であった。すぐ戻るけど。
「というわけで・・」
「何が、というわけでだ・・」
奏がそう愚痴るが憐はスルーし響に
「というわけで、響。勉強の合間だけど世界中回ろうか」
「へ？」
「いや、今中2だろ。来年高校入試だろ。それ受かるためにも勉強しなきゃなんないし・・」
「いやいやいや、誰に教えてもらうんですか⁉？」
「んーシェムザム」
「お呼びか？王様」
「いつの間に・・」
いつの間にか憐の横にいたシェムザムに憐は聞く。
「お前は、確か人間界の勉強出来たよな？」
「取り敢えずはハーバードとか言うのには受かるとは思いますが・・」
「ハーバード大学に受かるんですか⁉？」
そこで響が会話に入ってくる。
「あれ、響。言葉分かんの？」
「分かるも何も日本語じゃないですか」
それには喋っていた流石の憐も驚く。憐は日本語とインベスの言語でしゃべられてもどちらで話しているのかがわからないのだ。だから、まさか日本人に対していわかんのない
「じゃあ、響に勉強を教えてやってくれないか？」
その頼みにシェムザムは快く頷く。
「わかりました」
そのシェムザムに少し怯えながら響も頼み込む。
「よっよろしくお願いします！」

「ああ、よろしく頼むぞ」
（意外といい人？なのかもしれない）
「さて、勉強だけする訳にはいかないので・マキシム」
「呼んだか？我が王よ」
「ああ、響に戦い方を教えてやって欲しいんだ。槍術や剣術などじゃなくて体術を。勿論、槍術や剣術も教えてもいいが」
　この頼みにシェムザムと同じく快く頷く。
「わかりました。我が王よ」
「お願いします！」
「おう！こちらこそだ！」
（この人？もいい人だ）
「おお、もう日本語喋れんのかよ。速すぎだろ」
「お褒めにあずかり光栄だぞ。我が王よ」
「取り敢えず、今からはマキシム。基礎練習を教えてやってくれ」
「おう！任せておいてくれ！」
　その軽い口調がシェムザムの感に触ったのかシェムザムが立ち上がりマキシムに突っかかる。
「貴様！王に向かってなんて口の利き方だ！やり直せ！」
　その言葉にマキシムも反論し
「ああ！別に構わんだろ！王が怒っているわけでもないし！」
「いいや！許さん！私が貴様に礼儀とはなんたるかを教えてやる！」
「上等だ！かかって来いよ！」
「アワアワアワ・・」
　響がその様子を見て慌てるが母親達はコーヒーをもらって飲んでいた。マキシムとシェムザムの一発触発の雰囲気に憐が待ったをかける。響が止めるのかと思うと
「お前ら、外でやれ」
　止めるどころか、ただ外でやれと言うだけ。それを聞いたマキシムとシェムザムは向かい合い
「だ、そうだ。逃げるなよ！マキシム！」
「その言葉にそっくりそのまま返してやるぜ！シェムザム！」

そう言って、二体のオーバーロード達は出て行く。
「もう少し、仲良くやれんかね」
そう呟き、憐は話を終わらせる。
「まぁ、以上だ。解散！」
「あっ！憐さん師匠達の戦い見てもいいですか？」
「いいけど、俺の側から離れんなよ。巻き込まれて死ぬぞ」
「マジっすか・・」

戦いを見た立花響の感想
「師匠達ヤバい・・」

番外編　バレンタインデー

２月１３日、明日はバレンタインデー。私、立花響はお世話になってるお礼に、憐さんにバレンタインチョコをあげることにした。でも、バレンタインチョコをあげるなんて初めての経験という事で

「奏さーん！」

「おー、どうした？」

　困った時のヘルプミー奏。

「奏さん！憐さんにチョコあげたいんですがどうしたらいいでしょうか！」

「うぇ！私に聞くか。それ」

「はい！奏さんも憐さんにチョコあげるんですよね？だったら、一緒にと思って」

「いや・・私は・・」

「あげないんですか？」

「いや・・」

「あげないんですか？」

「あげるよ！チクショォ！」

「だったら、手伝ってください！」

「はぁ、わかったよ・・」

　そこで、私達は宮殿のキッチンに移動します。憐さんは今は資金調達兼マフィア狩りしに世界回っていて明日帰ってくることになってる。

「さて、私達はチョコを作る訳だが・・まず、どうするか？」

「Ｌ○ＴＴＥのＧｈ○ｎａはどうでしょうか？」

「成る程・・確かにＬＯ○ＴＥのＧｈａ○ａなら手作りチョコの土台としての代名詞だ。だが、誰に買いに行かせるか・・私は死んだ人間だから行けない。恋歌も私に似てるからアウト。響は・・」

「私・・行けます！確かに人がまだ怖いけど憐さんにはそれ以上の事を貰ってます！少しくらい恩返しがしたいです！」

「・・そうか。響ならいけるだろう。・・だが、マキシム！」

そこで奏は響の師匠であるマキシムを呼び出す。
「呼んだか？姫様」
「ああ、響が外に出るんだ。影で守ってやってくれないか？」
「嫌だ。響はもう立派に戦える俺の助けなんていらねぇよ」
「師匠・・」
「だが、・・」
「大丈夫。へっちゃらです。師匠にそこまで言ってもらえるんです。ここで頑張らないと！」
「そうか・・じゃぁ、行ってこい」
「はい！いってきます！」
「はいよ。いってらっしゃい」
そうして、響は憐が固定してあるクラックを通り人間界に行く。
「う・・怖い・・」
そう言いながらも一歩足を踏み出し近くのスーパーに走る。体が感じる恐怖を振り払うように。
「いいのか？見に行かなくて？」
「いいんだよ。姫様。響ならそこらの人間には負けないさ」
「違う。私が心配するのは身体面じゃない。心の方だ」
「・・姫様。ちょっと、体が動かしてきます」
「はいよ、行ってらっしゃい」
一方その頃、響は無事にスーパーに行き大量のＬ○ＴＴＥのＧｈ○ｎａを買っていた。ちなみに、買うお金は憐が奏と響、響の母親、祖母に分配して渡している。
「買えた・早く帰ろう・」
無事に買えて、憐の人間界に持っている家に帰る道を歩いている。このまま無事に帰ればよかったのだが・・
「あれ～『人殺し』じゃんｗｗｗ」
「ッ！」
どうやら、この世の中は随分響に厳しいようだ。そこには、ライブの後に響のことを虐めていた男が四人も並んでいた。
「本当じゃん。『人殺し』だｗｗｗ」

「へー彼女があの『人殺し』なんだｗｗｗ」
「よう。『人殺し』また、人を殺しに行くのかｗｗｗ」
「「「ｗｗｗｗｗｗ」」」
「ア・・私は・・人殺し・・なんか・・じゃない・・」
「アア！お前は人殺しなんだよ！俺たちがそれを教えてやる！」
「「「ｗｗｗ」」」
「イヤ・・」
　そうして、男達は響の髪を無造作に掴み人の来ないところへ連れて行く。不幸にも響が連れ去られて行く時には周りには誰もいなかった。人の来ないところへ連れて行くと男達は響を投げる。
「何持ってんだよ！」
　一人の男が響の持っていた買い物袋を奪う。
「あ・・返して・・」
「大量のチョコじゃんｗｗｗ」
「死体にあげるんだろｗｗｗ」
「『人殺し』だもんなｗｗｗ」
「こんなもん、いらねぇよな」
　そう言って、チョコを地面に落とし踏みつけようとする。だが、
「駄目！」
　響がチョコの上に被さり踏まれるのを防ぐ。
「グ・・」
「あ？・・なんだよ。そんなに踏まれたいか！」
　そう言い、次々に響を蹴り踏み出す。
「ｗｗｗ。楽しいなｗｗｗ」
「どうよ？『人殺し』踏まれる感じは？」
「嬉しいよな！なぁ！『人殺し』！」
　響はオーバーロード達と訓練しているのでこの蹴りや踏みは痛くはない。ただ、心が痛かった。
（どうして？どうして？どうして！平然とそんなことできるの！痛い！痛い！痛い！）
　思わず、ポツリとこぼす。

「誰か・・助けてよ・・」
「あ？・何言ってんの？『人殺し』なんて誰も助けねぇよ」
「「そろそろ、我慢の限界だ・・」
そんな時二人の男の声が聞こえてきた。男達は響を蹴るのを止め声の聞こえた方を見る。それは二方向だった。後ろと
「上？」
そう、上だ。上には金色の光の球が浮いていた。そんな事が出来る人といえば。空に浮く光の球から声が発せられる。
「遅かったな。マキシム」
後ろに立つ男が返事をする。
「悪かった。王様」
そう、憐とマキシムである。
「憐さん・・師匠・・」
憐は光の球を消し、響の横に降り立つ。男達は動揺し一歩後ろに下がる。
「なんだよ！・テメェら！」
「お前らに教える名前などない・・」
「しいて、言うなら響の味方だな」
「『人殺し』の・・」
その瞬間、二人から物凄い殺気が放たれた。その殺気に男達は響から離れる。しかし、前は憐に背後はマキシムに抑えられているために逃げる事ができない。
「二度とその言葉を言うな・・言ったものから即座に消す・・いいな。言った者から種を植え付けろ」
「仰せの間に。王様」
これがブチ切れた二人の最大限の助保だった。しかし、死ぬという事を理解していない。遊んでいるだけのチンピラに分かるわけがない。
「ハッ！・『人殺し』を『人殺し』って言ってなにが・・」
その瞬間マキシムが近づきその男の頬を薄く切る。そうしたら、憐は響を抱き締め見えないようにし力を使って音が聞こえないように

する。
「なんだよｗｗｗ。この程度・・」
　男は嘲笑するが、マキシムは一切笑わず言い放つ。
「ああ、これからだ」
　その瞬間、切られた頬が緑に輝きそこからヘルヘイムの森の蔓が生えてくる。激痛とともに。
「ギ・・ギャァァァァァァァァァ！・イタイ！・イタイ！・イタイ！・トメテ！・トメテ！・ギャァァァァァァァァァァァァ！・イヤダ！・イヤダ！・イヤダ！・シニタクナイ！・シニタクナイ！・シニタクナイ！・ダレカ！・ダレカ！・タスケテェェェ！」
　痛みでのたうちまわるその様子に他の男達は逃げ出そうとする。が、そんな甘い事をするオーバーロードではない。憐が命令で他の人は襲うなと言っているから襲わないだけであってマキシム自体は人を殺す事を何とも思わない。むしろ、この一件で人間の守る価値と言うものが分からなく、なっていた。今のマキシムは王が襲わないと言っているから守っているだけであって王が許可すれば響とその家族以外は根絶やしにするつもりですらあった。そんな訳で操った蔓を使い逃げた男達を拘束し連れ戻す。憐は響をクラックを開けて中に戻すとマキシムの方へ行く。
「マキシム・・」
「止めんなよ。王様・・俺は今久し振りにキレてんだ・・」
「止めるわけないだろ。むしろ・・俺も混ぜろ」
「ハッ！差別が酷い神様だ！」
「何、当たり前の事を響は俺の大切な家族だ。悪いが家族が傷付けられて落ち着いているほど俺は人間が出来ていない！」
「と言うわけで・・」
「「お前らには死んでもらう」」
　そこで憐が安心されるように
「ちなみに、お前らの家族も響を『人殺し』と呼んでいたそうだが反省していないので、もうヘルヘイムの森の一部になってもらっている。

あとは、お前らだけだ。だから、安心しろ」
「お前らは苦しまずに死なせるつもりはない。これは王様が何と言おうともだ」
　憐はクラックを開き初級インベスを四体呼び出す。そして、命令する。
「喰らい付くせ」
　一人につき二体ずつ足の先からゆっくりとインベスは咀嚼していく。マキシムも男の手を切り種を植え付ける。いつも通り蔓が生えてくる。もちろん激痛とともに。
「「「ギャアアアアアアアアアアアアアアア！」」」
　インベスに咀嚼されている方は足がゴリゴリと削れ離れていく感覚と共に。種を植え付けられている方は体中に根っこが伸びて体が喰い破られる感覚がする。
「タスケテクレ！」
「オレタチガワルカッタ！」
「ダカラ、ユルシテ・・」
「「「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」」
　男達は助けを求めるが憐とマキシムは当然の様に言い放つ。
「「お前らに与える慈悲などない」」
「「だから、大人しく死ね」」
　ヘルヘイムの宮殿に戻った響は泣いていた。そこに奏がやって来て頭を下げる。
「ごめん！響！私が甘かった！」
「いえ、へいき・・へっちゃらです・・」
「響・・」
　あまりに痛々しい様子に奏は一旦置くことにする。この子を慰める・・いや、助けられるのは心の優しき神様だけだろうから。それから、少し後に
「響！」
　慌てた様子で憐が入って来た。そこで椅子に座った怪我だらけの響を見ると響の前に正座をし土下座する。

「ごめん！」
「ちょ！憐さん⁉？」
　その様子に慌てたのか響は立ち上がり憐を起こそうとする。だが、憐は頭を上げず言葉を続ける。
「ごめん！俺が護るって言ったのに！護るって約束したのに！俺が助けるって約束守れなかった！どれだけ！罵声を浴びせても構わないし！どれだけ！殴ってくれても構わない！俺は！それだけの事をした！本当に・・ごめん・・ごめん・・ごめん」
　響は憐の前に行き無理をして笑う。
「だいじょうぶです！あんなのへいき！へっちゃらです！だから、憐さんが謝る事はありません！」
　その言葉を聞くと憐はいたたまれない気持ちになり思わず響を抱きしめる。
「響・・響ィ・・」
「もう・・なんで・・憐さんが泣くんですか・・私も・・泣きそうに・・なる・・じゃ・・ない・・ですか・・」
　その後、響は憐の胸で泣いた。その涙が枯れるまで泣いた。安心できる大切な人になった憐の胸で。
　次の日バレンタインデー当日。朝早く。
「奏さん！」
「響・・大丈夫か？無理しないほうが・・」
「へいき！へっちゃらです！憐さんにどうしてもあげたいんです！・・女の子と意識してもらえる様に・・」
「お前もか・・」
「お前もって。もしかして、奏さんも・・」
「だあ！そうだよ！」
「負けないですよ！」
「私も同じだ」
　二人は手を交わす。
「じゃぁ、チョコ教えて下さい！」
「わかったよ。その代わり特急でやれよ。バレンタインデーは今日な

んだからな」
「はい！」
　その日の夜・・宮殿のバルコニーで月を見ていた憐に背後にチョコを隠した奏と響が近付く。
「憐さん！」
「憐！」
「んーどうした？二人共」
　憐が振り返る。その金色に輝く髪を持ち赤く光る瞳を持つ神たる男。その上空には美しい月が浮かぶ。その幻想的な光景に二人は胸が高鳴る。
「えっと・・これ・・」
「これ・・バレンタインチョコ・・」
　奏、響の順に憐に可愛くラッピングされた包みを差し出す。憐は少し驚いた様だが手を伸ばし受け取る。
「ありがとう・・スゲェ嬉しい・・」
　憐のその微笑に二人の高鳴っていた胸はさらに高鳴る。憐はもらった包みを開けはじめる。中は
「おぉ・・」
　響はピーナッツの入った小さな丸いチョコで奏はピーナッツが入っているのは同じだがそこからさらに様々な形に加工しグラニュー糖がまぶしてあった。憐はまず響の方から手を付ける。
「うまい・・」
　丸いチョコを噛むと中にあるピーナッツの食感がいい感じにして柔らかいチョコとベストマッチ！し、絵も言われぬ美味しさを醸し出していた。それを響の様な美少女に貰うのだ。不味いはずがない。
「本当ですか⁉？」
「あぁ、うまい・・」
「よかったぁ」
「私は？」
　奏に急かされて憐は奏のチョコの星形に加工されたチョコを口にする。

「美味いぞ！これ」
　そのチョコはただ甘いだけでなくチョコ独特の苦味を持ち、その苦味を上に振りかけられたグラニュー糖がうまく打ち消すかどうかのところに調整されている。しかも、チョコの形に合わせて上に振りかけるグラニュー糖の量を変えていた。
「へっ、当たり前だろ」
「あとは、部屋でゆっくり味わうことにするよ。コーヒーと一緒にな」
「ああ！」
「はい！」
　憐は部屋に戻ろうとしていた足を止め振り返り、二人に最高の笑顔で言う。
「ありがとうな。二人共。ごちそうさま」
　今度こそ憐は部屋に戻る。憐が見えなくなったら二人はガッツポーズをする。
「ヨッシァ！」
「ヤッターー！」
　そして、お互いを見てハイタッチをする。
「「イェーイ！」」
　二人が打ち合わせた手の音は車の音などの人の生活音が一切しない、静かなだが温かい世界の夜空に鳴り響いた。

新たな撃槍の目覚め

「今日は♪翼さんのＣＤ発売日♪特典♪特典♪」

響は今大人気歌手の『風鳴翼』さんのＮＥＷシングルを買いに憐さんと奏さんの分も一緒に買いにＣＤショップまで走っていた。憐が聞いていたのを聞かせてもらって以来すっかりハマって今では１ファンになっていたのだ。因みに奏があのツヴァイウィングの『天羽奏』であることも知っており・・ちゃっかりとサインは貰ってある。サインは今は人間界に移した響の家の中に飾ってある。

「ＣＤ特典♪ＣＤ特典♪ＣＤ特典・・ッ！」

響は楽しみ過ぎて気付かなかったがこの道は明らかに人がいなく、辺りには灰が漂っていた。そんなことができる奴と言えば・・

「ノイズか‼？」

響の後ろから色とりどりの生物的な外観を持ち、各々が奇声を発している。だが、外見上の共通点として、どのノイズにも液晶ディスプレイのように輝く部位が見えていた。ノイズ達は体を弾丸の様に打ち出し響に迫る。それを見た響は体を捻り避ける。

「師匠の拳より全然遅い！」

それもそのはず、最上級の戦闘の達人であるオーバーロード達に教えを請うていたのだ。これぐらい出来なければ師匠達に殺される！

「あれは！」

響の目の前では小さな女の子泣いていた。響はそのまま走り流れる様に女の子を抱えて逃げる。そして、目の前には川がある。ただ・・ただ一言だけ言わせて欲しい。

「不幸だぁぁぁぁぁぁぁ！」

響はそのまま川を飛び越え階段を駆け上がりビルの屋上まで逃げる。そこで女の子を下ろし一息つく。

「ここまでくれば安全・・な訳ないですよねぇ！」

そう、巻いたと思っていたが世の中そんなに甘くない。ビルの階段側からノイズがぞろぞろとやってくる。対して響は屋上の端に追い詰められていく。

「お姉ちゃん・しんじゃうの？・・」
その言葉に響は女の子の方を向き言う。
「そんなことない！神様は絶対に助けてくれる！だから、生きるのを諦めないで！」
響は自分が最も信じる神に祈る。自分が信じる大切な神様に。
（そうだよね。憐さん！）
そして、その願いは聞き届けられた。クラックが開きその中から憐が姿を現した。
「何してるんだ？響？」
「憐さん！」
「ああ、ノイズか。下がってろ」
「はい！」
そこて、ノイズ達の方を向き戦国ドライバーを取り出して腰に当てる。すると、ベルトが巻き付いて腰に固定される。そこからオレンジロックシードを取り出す。それを見た響は憐に聞く。
「今回はオレンジなんですか？」
「ああ、禁断がバレるとマズイからな。取り調べ受けても組織には俺のことは言うなよ」
「了解です！」
その言葉に頷くと、憐はオレンジロックシードを構えて人々を守ってきた英雄達が叫んだあの言葉を、弱き者達を守る為の力に手を伸ばすための言葉を叫ぶ。

「変身‼？」

そして、憐はオレンジロックシードを解錠する。
〈オレンジ！〉
憐の上にクラックが円型に開き中からオレンジが出てくる。
「うぁ！オレンジだ！」
憐は体を捻ってからロックシードを高く掲げ、ベルトに嵌め込む。
そして、ロックシードの掛け金を叩いて閉めベルトにロックする。

「オラァ！」
〈ロック！オン！〉
すると、ベルトから法螺貝のような音声が流れベルトの横に付いているブレード、カッティングブレードでロックシードを切る。
〈ソイヤッ！〉
ロックシードが開き上からオレンジが被さりアンダースーツを纏いオレンジの中では兜が装着される。
「オレンジを被ったぁ！」
女の子がその様子に声を上げ響は知っているので何も言わないが何処か悔しそうに見ているだけだった。そして、オレンジがだんだんと展開されていく。
〈オレンジアームズ！花道！オンステージ！〉
水の様なものが飛び散り変身が完了する。憐は手に持っていたオレンジの切り身の様な剣『大橙丸』を担ぎ名乗る。
「仮面ライダー鎧武！ここからは俺のステージだ！」
そして、ノイズの大軍の中に突っ込んでいく。それを見た響は心の中で思う。
（私も戦いたい！憐さんの横に立っていたい！守られてばかりはもう嫌だ！）
ドクン！
それに応えるかの様に心臓が脈打った。心の底から浮かび上がる歌を口にする。
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
その瞬間光の柱が立ち、体の全てを作り変えられる様な激痛が襲ってきた。体の隅から隅までそれこそ一つ一つの細胞まで作り変えられる様だ。それを見た鎧武は呟く。
「目覚めたか・・」
一方何も知らされていないヘルヘイムの森の中にある奏がトップを務めるノイズや聖遺物を発見するための施設の液晶に文字が映し出される。それを見た奏は思わず叫ぶ！

もう一つの人間界での対ノイズ用の組織の液晶にもある文字が警告音と共に赤いアルファベットの文字で表示されていた。それを見たガタイのいい赤髪の司令官ぽそうなおっさんが叫ぶ！

それは、同時だった。表示される文字は

『ＧＵＮＧＮＩＲ』

「「ガングニールだとぉ‼？」」

その文字を見た青髪の少女と奏はは呟く。

「「どうして、奏（私）のギアが・・」」

体が作り変えられる感覚が終わり光が収まると四つん這いになった響にアーマーが装着されていく。

「お姉ちゃん！お兄ちゃん！カッコいい！」

「ええ⁉？これ何イィ⁉？」

響の問いにはノイズをなぎ倒していく鎧武が答える。

「それはガングニールの欠片で！人が作ったノイズの戦うための武器！人を助ける為の力だ！そして、それの名前はシンフォギア！」

その言葉を聞きながら響は思う。

（シンフォギア・・人を助ける為の力・・これで憐さんの横に立てる！守ってもらってばっかりの恩を返せる！）

そこで鎧武が叫ぶ。

「響！その子を連れたまま逃げろ！シンフォギアを纏っている今ならここからは降りても大丈夫だ！」

響はその言葉を聞き女の子を抱えて躊躇なく飛び降りる。それを見た鎧武も屋上に残っていたノイズを腰に差していた無双セイバーを抜き、大橙丸と接続しナギナタモードに変化させる。響を追おうとするノイズの前に立ち宣言する。

「悪いな。ここから先は一方通行だ！」

そのまま、ノイズを一瞬で殲滅する。そして、先に降りた響を追って鎧武も飛び降りる。降りた先では響がノイズ相手に辿々しく戦っていた。

「響！シンフォギアを纏っているとノイズに触れても大丈夫だ！だから、迎え撃て！」

それを聞き、響は回避を優先する戦いから飛んできたノイズに合わせて拳を繰り出し潰していく戦いに変えた。鎧武もその横でノイズを倒していく。ある程度数が減ったと思ったらノイズが集まり巨大化した。
「デカイな」
「デカイですね・・やりますか？」
「いや良いだろう。あとは翼に任せよう」
「はい！」
そう、戦う二人の後ろからバイクに乗った翼が突っ込んできていたのだ。翼は乗っていたバイクを乗り捨てジャンプし、大型ノイズを一瞬で倒す。そして、残っていたノイズを駆逐していく。それを見た響は翼に聞こえない様に感嘆の声を上げる。
「おー！・凄い！・あれなら、上級なら倒せるけど、師匠達ならフルボッコにされる位の強さかな。まさか、一人でその領域まで行くなんて・・」
因みに響は師匠達と生身で渡り合える強さである。もはや、人外とかしている。すると、鎧武が小声で響に
「これ、盗聴器だから。持っておいて」
そう言って1ミリ位の物を渡す。
「了解です！・あのー因みにばれた場合は・・」
「うまく誤魔化しといて」
「うぅぅ、私ってやっぱり呪われてるかも・・」
「帰ってきたら、ご褒美あげるから」
「不肖！・この立花響におまかせ下さい！」
そんな話をしていると鎧武達の周りを黒服の人たちが囲んでいる。
「あなた達には我々に同行してもらいます」
「は・・はい！」
「断る」
（あっ・・声変えてる・・）
黒服の人たちの問いかけに響は頷くが鎧武は断る。
「そういう訳にはいかないんですよ」
「じゃぁ、逃げます」

「逃げれると思いですか？」
「やってみるか？」
　そこまで言うと鎧武は桜の花の絵柄がはいったロックシード『サクラロックシード』を解錠する。しかし、何も音声は鳴らなかった。鎧武はそれを上に投げる。すると、ロックシードが変形しバイクになる。響を除いた一同が驚いているのに対し鎧武はそのまま乗り込み黒服の人たちに薔薇の絵柄がはいったロックシードを投げる。
「風鳴翼に渡しとけ。バイクぶっ壊しただろ」
　そして、走り出す。そのバイクの音に正気に戻った黒服の人たちが慌てるがその中で好青年が車に乗り込み追いかける。
「翼さん！乗ってください！」
「緒川さん！」
　呼ばれた翼はそのまま緒川さんの運転する車の上に乗り走る。前にはサクラロックビークルに乗った鎧武が走っていた。だが、少し走ると鎧武の方からサクラの花びらのようなものが流れてきた。
「サクラ？」
　すると、鎧武がバイクに乗ったまま宙に浮き回転しだした。
「なっ！」
　そのまま鎧武は走る。すると、鎧武の前方に放出状にクラックが開く。そして、その中に入る。そしてすぐにクラックが閉じていくので翼達は入ることができない。
「クッ！」
　逃した事を悔やみながら翼達はもう一人のガングニールの奏者の元へ向かう。向かった先ではそのガングニールの少女が役員からコーヒーを貰っていた。
「あったかいものをどうぞ」
「あったかいものどうも・・」
　すると、響が纏っていたシンフォギアが解除され響はよろける。それを翼が支えた。
「ありがとうございます！」
　しかし、響を眺める翼の目は覚めたものだった。

（あーこれ、奏さんのガングニール纏ってるからか）
　奏と仲の良い響は奏からあらかたの事を聞いていたので翼が怒っている理由もわかるのだがそれを口にするほど響も野暮ではない。なので、助けてもらったお礼を言うことにした。
「あの・・翼に助けてもらったのは二度目なんです」
「二度目？・・」
「はい。一度目は二年前の翼さんの片翼だった『天羽奏』さんが亡くなったあのライブです」
「⁉？」
「私はあの時この胸に何かの欠片が突き刺さり、命が危うくなりました。その欠片がなんなのか今分かりました。奏者だった『天羽奏』のギア、ガングニールの槍の欠片だったんですね」
「⁉？貴様！何故！シンフォギアを知っている！」
「教えてもらいました」
「誰からだ！」
「それより先に翼さん達の指令に会わせてください。上が分からないのに信頼するほどぬるま湯に浸かっているつもりはありません」
「確かにその通りですね。翼さん。連れて行きましょう。すみませんがこれをはめてもらえますか？」
「いいですよ」
　緒川さんに言われて素直に手錠を嵌める響。そのまま車に乗り込み移動される。分かっていたとはいえ響はポツリと呟く。
「不幸だ・・」
　そうして響が連れて行かれたのは
「あれ・・リディアン？」
「そうです。私立リディアン音楽学院。その地下に私達の基地があります」
　そうして、車を降り歩きながら話す。
「という事は・・都・・いや、国が背負っている組織と見ていいですか？」
「鋭いですね。その通りです。僕らの組織の名前は『特異災害対策機動部二課』ですが、結構の無茶を通すとこもあるのでついたあだ名が

・・」
「もしかし『特機部二(突起物)』ですか」
そうこうする間にエレベーターに着いたので乗り込む。
「本当に鋭いですね。その通りです。あ・・手摺掴んでいてください。危ないので」
「？」
緒川さんの言葉に疑問を抱きながらも言われた通りに手摺を掴む。しかし、その疑問はすぐに氷解する事になる。その身をもって・・。エレベーターが急に速度を上げ落下していっているのだ。
「キァァァァァァァァァ！」
エレベーターの外には絵柄の書かれた広い空間か広がっていた。しかし、響はそんな事を気にする余裕はなかった。そうこうしているうちにエレベーターは止まった。緒川さんが腰が引いている響に声を掛ける。
「大丈夫ですか？」
「あはは、へいき、へっちゃらです」
「そこのあなた、ここから先は愛想笑いなど無用よ」
翼の言葉に響は笑いを止める。そして、何時でも逃げれる準備を誰にもバレない様にして構える。
(さぁ、邪が出るか吉がでるか・・)
エレベーターのドアが開く。その瞬間
パーン！パーン！

再開

パーン！パーン！

「へ？・・」

そこには垂れ幕に『ようこそ！特異災害対策機動部二課へ！』と書かれてありその下のテーブルには食べ物が積まれていて響にはクラッカーが向けられていた。横を見ると翼が頭を抱え呆れていた。その中で司令官ぽそうな人が響に声を掛ける。

「ようこそ！特異災害対策機動部二課へ！歓迎するぞ！立花響くん！」

「どうして、私の名前を・・」

「なに、我々は調査が得意なんでね」

そこで女性の方が

「そうそう、これ。返すわね」

その人が持っていたものは

「あー！私のカバン！なにが得意なんですか！見ただけじゃないですか！」

そう、女の子を助けるために持っていたカバンを捨てた、あのカバンだった。響は急いでカバンを開けて中身を確認する。

「あれ？あれ？あれあれあれ？」

そこで響は司令官ぽそうな人を見て聞く。

「ドライバーとロックシード・何処ですか？」

その問いと共に放たれた威圧感に司令官は半歩後ずさる。その事実が基地内を驚愕させる。司令官といえば人間を止めた強さを持っているＯＴＯＮＡだ。その強さはシンフォギアを纏っている翼でさえも超えるぐらいだ。その司令官が後ずさる即ちまともにやり合えるのは司令官だけということになる。

（むぅ！この威圧感、並の戦いでなんか身につくものではない。この少女、何者だ？）

「それってこれのことかしら？」

カバンを渡した女性が手にドライバーとロックシードを持ってい

た。
「それです！・返して下さい！」
　取ろうとすると女性はドライバーを上にあげて響に聞く。
「それより、これはなにかしら？私の解析でも解析出来なかったし。膨大すぎる力を持ってることぐらいしか、わからないのよね。話してくれたら返してあげるわ」
　その言葉に響は歯ぎしりする。
「返せ‼？」
　次の瞬間には女性の手にはドライバーとロックシードはなく、響の手元にあった。それを見た翼が思わず呟く。
「速い！」
　そんな翼を見もせず響はドライバーとロックシードを抱きめていた。
「良かった・・良かった・・」
「すまなかった。響君。良ければ話してくれないか？俺は風鳴弦十郎だ。一応、ここの司令官をしている」
　女性も自己紹介をする。
「デキる女で有名の桜井了子、３４歳よ。よろしくね」
　次にオペレーターの男女が
「オペレーターの藤堂朔弥です。よろしくお願いします」
「友井あおいよ。よろしくね」
　響はドライバーとロックシードをカバンになおして謝る。
「立花響です。すみません。取り乱して・・ご飯の席で埃を立ててごめんなさい・・」
　響は憐から食べ物を粗末にするなということを叩き込まれている。ご飯が用意されている中で走り回る、今の場面を憐に見られると地獄の特訓をさせられる。響は弦十郎と向き合う。
「話す事は構いませんが先に私がシンフォギアを纏えたことを調べないんですか？」
「そうだな・・それが先か・・了子君」
「はいはーい。取り敢えず脱いでもらいましょうか」

「へ？なんでええええ！」
了子さんに引っ張って連れて行かれたの響が見えなくなると緒川さんが源十郎に近づく。
「風鳴司令、響さんのあの速さは・・」
「ああ、俺の本気と同等の速さかそれ以上だ。それにあの威圧感に対して普通の高校生のような時の様子・変わりすぎている。・歪だな」
検査を終えて帰ってきた響と全員に了子さんが結果を告げる。
「響君の体は正常。でも、胸のこの傷の下。施術での除去は不可能の欠片・検査した結果・第三聖遺物『ガングニール』だという事が判明したわ。奏ちゃんの置き見上げね」
その言葉に翼は倒れそうになり緒川さんに支えてもらっていた。そのまま翼は外出する。
「翼・・」
「翼ちゃん。まだあの事を・・」
響はその事を聞き
「やっぱりですか・・」
「やっぱりって響君はこの事を知っていたのか？」
「多分そうじゃないかと・確証はありませんでしたが。理由としては、私は二年前の翼さん達のライブで一度シンフォギアを見ていました。その時に何かが私の体に突き刺さることも。別に奏さんを恨んでいるわけではありません。その事についてはへいき、へっちゃらです」
「二年前の・成る程・今日はもう帰ってもいいぞ」
「いいんですか？私はなにも話していないのに？」
「ああ、構わない。だが、これだけは持っておいて欲しい」
「それ位なら構いません」
そう言って響は弦十郎からデバイスを受け取る。そして、リディアンを出る。校門までくると校門にもたれかかるように立っていた人がいた。
「憐さん！」
憐である。響は憐の方に駆け寄る。

「おかえり。響。どうだった？」
「信じてもよさそうな感じはした・・けど、了子さんが少し危ない感じがしたような気がする」
「そうか・・お疲れ。響」
そう言って響の頭を撫でる。
「／／／」
響は真っ赤になって俯く。そうして、憐は響の手を繋ぐ。
「憐さん⁉？」
「言っただろ。ご褒美あげるって。嫌だった？」
「うんうん。そんな事・・ない・・」
「じゃ、帰ろうか」
「うん！」
そう言って憐はクラックを開けて中に入る。響も手を繋がれながら入る。
その後、
「響ーこっちおいで」
「憐さん。なんですか？」
「これ何？」
それは録音していた二課との会話だった。
『ご飯の席で埃立ててごめんなさい・・』
「あっ・・」
響はダラダラと冷や汗を流しながら待つ。
「まぁ、何時もなら怒るんだけど・・今回は許そう」
「やった～！」
「戦国ドライバーもロックシードも持っておかれたらダメだからな。今回だけ許そう」
「わーい！」
「だが！」
「え・・」
「これは別だ。マキシム」
と、一見チャラそうだが脱げば凄そうな男の人が出てくる。人間に

化けたマキシムこと響の師匠だ。
「おう」
「まさか・・」
一度止んだ冷や汗が再び噴き出してくる。
『キァァァァァァァァ！』
「どういう事だ？響」
マキシムが問いかける、それにしどろもどろに答える。
「ええっとですね。完全に油断したところの不意打ちといいますか。絶叫マシンと言うか・・」
「その程度で怯むとは言語道断！問答無用！と言いてえ所だが・・」
「およ」
「許してやる」
「やった～！でも、どうしてですか？師匠？」
「まぁ、ここに住んでる事も俺たちオーバーロードの事も直ぐにバレるとは言え、まだ避けておきたいからな」
「あっ！師匠。二課に師匠と渡り合えそうな人が居ましたよ」
「マジ⁉？」
「大マジです！」
「一度手合わせしてみたいもんだ」
と言う会話があったとか。

♦？♦？♦？♦？♦？♦？♦？♦？♦？♦？♦？

風鳴翼は今日は珍しく仕事が無いので一人である所に来ていた。それは、墓場だ。亡くなった『葛葉』家の墓だ。供え物を緒川さんに頼んで揃えてもらいバイクを走らせてやって来ていた。翼は墓場の中をゆっくりと歩きながら目的の墓を目指す。

「ここに来るのも久しぶりだな」
そして、目的の墓に着いた時一つの違和感を覚えた。
「ん？花が新しい？それに水も・・」
葛葉家の両親の墓だけが花を変え水も入れ替えてあった。
「極め付けは、この線香だ」
そう、両親の墓にはまだ煙の残る線香が残っていたのだ。しかし、憐の墓には何も手が入っていない。
「誰かがこの墓を参りに来た？しかも、憐の両親の墓だけを・・一体誰が？」
ふと憐の墓を見ると墓の上に箱が一つ置いてあった。表には
『風鳴翼様へ』
と書かれており不審に思い裏返すとそこには驚愕の文字が書いてあった。
「葛葉憐よりだと！」
翼は急いで箱を開けると中には手紙とネックレスが入っていた。
翼は手紙を急いで読んでいく。そこにはこう書かれていた。
『風鳴翼様へ
お前がこの手紙を読んでいるという事は多分生死不明か死んでいると思う。だが、気にしないでくれ。自慢じゃ無いが俺は約束を破った事が無いんだ。必ず約束は守るから安心してくれ。死んでたって生き返って会いに行く。一応、一緒に入っていたネックレスは俺が死んだ場合にお前が羽ばたけるようにと１８の誕生日に送るつもりだったんだが渡してくれって頼んだ奴が適当な奴だから少し遅れるかもしれない。もし、翼に仲間が出来たらそいつとは仲良くしてやって欲しい。もし、ノイズを操っていた奴が仲間になっても、誰かがお前の友達の形見を持っていても、そいつらとは仲良くしてくれ。それが生きている俺からの最後の願いだ。（なんか書かなきゃいけない気がした）俺はお前が心配だ。なんせお前の・・やっぱり止めた！生き返ってこれを見て恥ずかしかったら困るからここで止めだ。じゃぁな！
ｐｓ．一緒に送ったネックレスずっと持っててくれると嬉しい。

お前を守ってくれるまじないを掛けといたから。ちなみに特注品だぞ。

葛葉憐より』

それを読み終わり翼は崩れ落ちる。

「お前はエスパーかなにかか。憐」

翼は久しぶりに泣いた。誰もいないこの墓場で大きな声で泣いた。その首には憐から贈られた、まるで二匹の鳥が飛んでいるようなマークのような形をしたネックレスが光っていた。

その様子を遠くから見ていた影が一つ。その影はポツリと

「すぐ帰るさ。必ずな」

そう呟きクラックの奥へと消えた。

だが、泣き止んだ翼は決意の目を持って宣言する。

「でも、だからこそ！私は立花を認めない！もう二度と仲間を失わないために！」

きしくも、憐が願ったこととは全く別の方に。

ーーーー夜ーーーー

人間界に作ってある家でゴロゴロしていると突然、響の渡されたデバイスがなった。

「はい！立花です！」

相手は弦十郎だった。

『響君か。今、ノイズが出た』

「本当ですか！何処ですか？すぐ向かいます！」

『地点は○○○○。頼むぞ』

「了解しました！」

そこで響は通話を切る。響は一緒にいた憐に声をかける。

「じゃぁ、行ってきます。憐さん」

しかし、響の会話を聞いていた憐はドライバーとロックシードを掴み、戦闘用の準備をしていた

「俺も行く」

「憐さんも行くんですか⁉？」

「ああ、一応隠れているが何かあったら正体もバラす覚悟だ」
「いいんですか？」
「ああ」
「分かりました。行きましょう！」
　現場に着くと翼がもう着いていて戦っていた。響も、翼に続く様にノイズを駆逐していく。全て一掃を終えたら響は翼に話しかける。
「翼さん！一緒に戦ってくれますか！」
　それを聞いた翼は持っていたアームドギアを響に突き付けられる。
「ええ、私と貴女戦いましょうか？」
　響は別に刀を向けられることに恐怖などは覚えない。それを言ったら素手であっても師匠であるマキシムの方がよっぽど恐怖である。それに、翼とは戦う理由が見つからなし、第一今は一緒に戦おうと言ったのである。
「違います！一緒に闘おうって意味で・・」
「ええ、だから私と貴女戦いましょう。私は貴女を認めない！だから、アームドギアを構えなさい！貴女の覚悟を見せてみなさい！」
　その言葉に響は戸惑う。奏からガングニールのアームドギアの形などは聞いて知っているがその出し方などはわからないからだ。
「突然、構えろって言われても全然わかりません！」
「なら、そんな覚悟で戦場に入ってくるな！」
　翼は天羽々斬のアームドギアである刀を響に対して構える。そして、駆け出そうとすると足元に銃弾が撃ち込まれる。翼は飛んで来た方を見ると鎧武が無双セイバーのガンモードを向けていた。
「邪魔をするな！」
　そう言って翼は鎧武に突っ込んで行く。
「はぁぁぁぁ！」
　鎧武は振り下ろされたアームドギアを半身で避ける。そして、次々と繰り出されるアームドギアの攻撃を無双セイバーで受けたり避けたりしていく。
「私は！二度と！大切な！ものを！失わない！全部！一人で！背負って！やる！だから！もう！決して！仲間など！作るもの

かアアアアアアアアアアアアア！」
　それを聞いた鎧武は初めて反撃に出る。アームドギアによる攻撃の一瞬の隙をついて右手で殴る。それをもろに受けた翼は吹き飛ばされるが受け身を取り鎧武を見る。すると、鎧武は四角形の他のロックシードとは一線をかすロックシードを取り出す。そして、そのロックシードの掛け金を解除する。
〈カチドキ！〉
　そして、鎧武の上空に円状にクラックが開き、他のアームズとは明らかに違うボルトの模様が入った重厚なアームズが出現する。そしてドライバーのオレンジとカチドキロックシードをはめ替え掛け金を叩いてロックする。
〈ロック！オン！〉
　そして、カッティングブレードをおろす。
〈ソイヤッ！〉
　そして、カチドキアームズを被る。
〈カチドキアームズ！いざ！出陣！エイエイオー！〉
　そして、段々とアームズが展開されていく。背中に回転しながら旗が装備されていく。完全に展開されるとそこには全身を重装甲の鎧で包み、背部には武器としても使用可能なカチドキ旗を備え、胸部中央には鎧武の紋章が描かれている。兜は前立ての形状が変化し、新たに鍬形のようなブレードが追加された『仮面ライダー鎧武　カチドキアームズ』鎧武の持つ超強化形態だ！
「本当にそんな事を思っているのならその思いをぶっ壊す！」
「姿が変わったところでぇ！」
　翼は刀を構え斬りかかる。鎧武はそれを避けようともせず受け止める。しかし、翼の攻撃は鎧武の鎧に傷一つ付けない。そこから翼は連撃を打ち込んでいくがダメージの一つも入らない。翼は埒があかないと見たのか一度距離を開けアームドギアを空へ投げ自身も飛び上がる。巨大化した刀を鎧武に向かって蹴り込む。
【天ノ逆鱗】
　それを見た鎧武はカッティングブレードを一回倒す。

〈ソイヤッ！カチドキスカッシュ！〉
本来なら足に力を溜め撃ち出す蹴り技なのだがあえて拳に溜め天ノ逆鱗を迎え撃つ。翼は撃ち出しつつ叫ぶ。
「何も知らない奴が入ってくるなぁァァァァァ！」
鎧武も叫び返す。
「知ってるからここにいるんだろぉがァァァァァァァァァ！」
そして、鎧武と翼が激突する。
「はぁぁぁぁぁ！」
「いい加減にしろオオオオオオオオオオ！」
そして、鎧武が翼をせり飛ばす。せり飛ばされ地面に落ちていく翼を鎧武が飛んでお姫様抱っこで受け取める。そして着地する。
「なっ！離せ！」
翼は鎧武にお姫様抱っこをされたことを嫌がり身をよじるが。
「はいはい。分かったよ。翼」
鎧武の元の声に戻したその声に翼は固まる。
「まさか・・その声は・・憐・・なのか？」
鎧武は翼を抱えたままロックシードを閉じる。すると、鎧が粒子化し解除されていく。光が全てさるとそこには翼の大切な幼馴染の顔があった。
「ただいま。翼」
「憐・・憐・・憐！」
思わず翼は憐に抱きつく。
「ちょ！翼！響が皆んなが見てるから！」
「知らない・・憐・・憐」
翼は抱きついたまま離さなかった。憐に回された手はきつくきつく抱きしめていた。もう、離さないと表すように。

オーバーロードとの邂逅

「翼・・そろそろ」
「ん・・」
　そうやって憐は抱き付いてる翼を離す。翼は名残惜しそうにしながらも離れる。憐は離れた翼にかなしそうな目を向ける。
「翼・・悲しい事言うなよ・・」
「憐？」
「一人で背負うなんて言うなよ」
「ッ！」
「俺がこの力を手に入れて翼を助けられると思うのは駄目なのか？俺じゃ、翼の仲間にはなれないのか？」
「ううん。嬉しいけど・・あの子は・・あの子の持つギアは・・」
「ガングニールか？」
「知っていたのね。そう。あのギアは奏の・・あの子に・・奏の代わりが詰まるとは・・」
「それは違う」
「え？」
「奏さんは奏さんだ。響じゃない。二人は別人だよ」
『その通りだ』
　その瞬間、翼の後ろが輝き人が現れる。
「奏⁉？」
「おい、どうしたんだよ？翼」
「何って見えないの？憐！あそこに奏が！」
「何って、何もいないじゃないか」
「嘘・・」
　混乱する翼に向けて奏は声を掛ける。
『そこの響ちゃんは私じゃない。私とは違う人間だ。だから、代わりとか考えないで認めてやってくれないか？』
「でも、あのギアは・・」
『確かにあのガングニールは私のギアの欠片が元だ。だが、忘れるな。

シンフォギアは人に応じて姿が変わる。だがら、ガングニールのアームドギアは槍だけじゃない。あの子には戦う覚悟はある。だから、私は安心して任せられる。』
「おい！翼！」
「憐？」
「本当にしっかりしろよ。大丈夫かよ」
　翼は一瞬奏から目を逸らし憐を見る。すぐに目を戻すがそこにはもう奏の姿は無かった。
「大丈夫だ・・憐に会えた事で死んだ者の亡霊を見ていたようだ」
「そうか・その人はなんか言っていたか？もし、言っていたらその人の言う事を聞くようにな。（まっ、本当は俺にも見えているんだが、それを話すと色々マズイ。力についてバレたりすると二番目との戦いに影響を及ぼす可能性があるからな）」
「フッ・お前は本当にエスパーか」
「違う・只の人間だ」
「そうか・・」
　そこまで話すと響が近づいてくる。
「憐さん」
「憐君」
「おう、響」
「憐さん、帰りましょう！」
　憐はそれに溜息をつきつつも答える。
「帰るか！今日の飯はお好み焼きだ！」
「ヤッター！ヤッタ、ヤッタ、ヤッター！いっぱい食べますよぉ！」
「たく、材料買い足さないとな」
　その会話に翼が待ったをかける。
「立花は憐と知り合いなのか？」
「はい！知り合いというか一緒に住んでいます！」
　その瞬間翼の額に青筋が浮かんだように見えた。翼は立ち上がり響の目の前に立つ。そして、翼は響の肩を掴みボソボソと呟く。それに対し響も囁き返す。それを聞いた二人は同時に離れ拳と刀を構え

る。それを見た憐が慌てて止める。
「おい！お前ら止めろって！」
「そういう訳にはいかない。立花と戦わなければいけない理由が出来た」
「でも・・」
「「憐（さん）は黙ってて！」」
「はい・・」
何故か響にも止められた憐は大人しく引き下がる。
「立花・ぶっ飛ばされる覚悟はあるか？」
「翼さんこそ」
次の瞬間翼と響は消えた。と思うと上空で撃ち合っていた。
「速！」
その速さは憐ですら驚く程の速さだった。さらに一番驚く事が
「くッ！翼さんの戦闘を見てた限り圧倒できると思ったのに・・！」
そう、明らかに実力差があった筈の響と互角に戦えていると言う事だ。響の強さは言った通りオーバーロードについていけるぐらいの強さである。対し、翼は上級と互角ぐらいである。オーバーロードと上級ではその差は歴然としている。なのに、翼は渡り合っている。
「あまり舐めないでいただきたい！ほんにゃらする乙女は強いという事だ！」
「それを私に言いますかぁ！」
そうして、二人は加速していく。拳と刀を打ち込み、同時に吹き飛ばされる。が、響も翼の受け身を取り己の相手を見る。じりじりと間合いも詰め、翼が飛び上がり天ノ逆鱗を放つ。響はそれを避けようとするが動かない。その理由は
「これは⁉？」
響の陰に小太刀が刺さっていた。
【影縫い】
「影縫いだ！」
高速に迫る刀を見てさて、どうしようか？と考えていると、その刀は響に当たらないコースで飛んで来ていたのだ。響はこれは避ける

必要がないと考え動かない。響の予想通り翼の天ノ逆燐は響からずれて響の横に突き刺さる。翼はそのまま落下していく。落ちた翼の側に憐と今来たばかりの弦十郎が近付く。しかし、二人は足を止めてしまう。
「翼・・お前泣いて！」
「泣いてません！この身は剣であると誓った身！剣に感情など不要！だから・・泣いてなど・・泣いてなど・・いません！」
「はぁ、憐君。頼んだ」
「了解・・」
　弦十郎に頼まれた憐は翼に近付き抱き締める。
「翼・・泣いていいんだ。俺が見た事のある剣には意志のある剣だって見た事ある。そんな剣は『妖刀・魔剣』って言われてた。意志のない剣『名刀』は『妖刀』に負ける。翼は『名刀』を止めて『妖刀』になればいい」
「うん・・うん・・うん」
　そうして、翼は泣き出す。憐は翼の背中をさすりながら源十郎と話をする。
「お久しぶりです。弦十郎さん・・」
「憐君・・君は聖遺物を見た事があるのか？」
「ええ、弦十郎さん達が完全聖遺物と呼ぶものも幾つか・・俺と響の家にも一つあります」
「何！だったら・・」
「渡しませんよ」
「どうしてだ？」
「言ったでしょ、意志のある剣を見た事があるって」
　そこで翼が泣き顔のまま憐に話し掛ける。
「憐・・グスッ・・その剣・・グスッ・・見せて・・欲しい・・グスッ」
　その言葉に憐は快く頷き答える。
「いいぜ。今から呼び出す」
「えっ！今から・・」
「その剣はカリバーンつってな別名エクスカリバーとかカリブルヌッ

スとか色々別名がある剣でな。・・来い！・カリバーン！」
　その瞬間憐の目の前に金に輝く西洋剣が現れた。憐はその剣を掴む。すると、剣から光が発せられ、光が憐をなぞるように移動する。その光は鎧を形成していく。そして、光が消えるとそこには鎧を纏った憐がいた。
「憐・・それは・・」
『シンフォギアではないわよ』
　唐突に聞こえた女性の声に翼も揃って疑問を持つ。
「誰？」
「カリバーン」
「ああ、成る程カリバーン・・って」
「えええええ‼？」
　憐の言葉に翼だけでなく監視をしていた二課の面々も驚く。
『この鎧は私の力を圧縮した自作の鎧。シンフォギアのように総数３億１６５万５７２２のロックがかかっているわけでもない。聖詠もフォニックゲインも必要としないが、私が認めたものでしか私を扱う事は出来ない』
　そこで響が憐に聞く
「憐さん。アンちゃんは？」
　響の問いに憐は渋い顔で頷く。
「響・・まぁいいか。来い！アヴァロン！」
　すると、カリバーンが金色の鞘に包まれる。
「「二つ目だと！」」
　翼と弦十郎が同時に驚くが憐と剣達には関係なく。
『やっほー！・どうしたの？マスター！・』
『そうだ。マスター。なぜ呼んだんだ？見たところノイズも出ていない様だし。マスターだって知っているだろう。私を他の人ならまだしもマスターが振るえばこの辺りが消滅する事ぐらい。そんな危険な剣である私達を用もないのに呼んだのか？』
「いや、そこの俺の幼馴染の翼が意志と言うより感情のある剣を呼んで欲しいって言ったから呼んだわけ」

『『なるほど（ねー）』』
「すいません・・急にお呼びたてしまして・・」
『いや、構わない。それより貴君がマスターの自慢する幼馴染か・・』
「憐が自慢した・・⁉？」
『ああ、マスターが【俺には、自慢出来る素晴らし・・』
話していたリン（カリバーン）急に黙る。何故なら
「リン・・ちょっと黙ろうか・・」
羞恥に身を染めた憐が殺気を撒き散らし、黙らしたからであった。
そこにアンがリン以外誰にも聞こえない様に念話を憐に向ける。
『で・・マスター。それだけじゃないでしょ？』
『流石に気付いていたか・・そうだ。実はな・・（憐説明中）という訳だ』
『なるほどね・・そういう事・・』
そこでアンは念話を切り翼に話し掛ける。あたかも、自分で気付いたかのように。
『貴女・・昔の頃のカリバーンに似てるわね。まるで自分は選定の剣であろうとして感情を押し殺し感情など不要って言ってたカリブルヌッスであり、湖の乙女に鍛え上げられて変わるまでのカリバーンに』
「リンさんにもそんな頃が・・そうです。私は相棒だった人を失いました。それは自分が弱かったからだと剣に感情を持っていたから戦いに感情を持ち込んだからこそ失ったのだと。だから、感情を失うように努力しました。ですが、憐や奏を思い出す度に悲しくなり後悔してきました」
『そう、少しキツく言わせてね。そんな剣であろうとして名刀どころか剣にすら劣る鈍らな貴女を見て憐やその人はなんて思うでしょうね。人間は感情を持たない兵器にはなれない。ましてや、ノイズが現れてから貴女のように剣などのただノイズを殺す為の兵器であろうとした人間はたくさん見てきた。そのすべての人間が失敗し死んだ。人間は兵器にはなれない。それに私達意志を持つ剣・・私は鞘だけど『妖刀』は感情をなくそうとした時からはただの剣に劣る。感情があるから私達は強いんだ。それをよく覚えておけ』

アンの言葉は最後は怒りで口調が変わった。憐はまさかここまで言うとは思わなかったのでアンを咎めるが
「アン、少し言い過ぎ・・」
「良いんだ。憐。アンさんの言う通りだ」
そこで翼はアンに聞く。これから自分はどうすれば良いのかを。
『それは・・』
『おっと、リンちゃん。ストップ』
「何故ですか⁉?」
『貴女は自分の生き様まで他人聞くの?極端な話、私達が『人殺し』になれ・・』
「『アン‼?』」
その瞬間アヴァロンからまるでなにを咎める様に甲高い金属音がなった。カリバーンが内側から攻撃したのだ。
「アンさん?」
翼が疑問を持ち何故リンと憐が怒ったのかを聞こうとすると
「あ・・アアアアアアアアアアアアアア!」
突然、頭を抱え響が叫び出した。
「立花⁉?」
あまりに突然の事で翼は戸惑うが憐達は慌てた顔をする。
『ヤバ・・』
『響!』
「リン・・後で説教」
「うぁ・・ガアアアアアア!」
響の胸の部分から黒いものが広がり響を染める。響は瞳が赤くつり上がり、その瞳以外は漆黒に染められていた。
「ガアアアアアアアアアアアア‼?」
そのまま憐に向かって突っ込んでくる。憐はその様子に慌てずにアヴァロンとカリバーンを構え、響を避ける。響の攻撃を避けつつも冷静に考える。
(さて、響は怪我一つなく保護。こちらは武器を振るえば響が消し飛ぶから使えない。実質、拳一つで止めるのか・・無理ゲーだな。俺じゃ

なきゃな）
　そう普通なら無理でも憐は何十億のインベスをまとめ上げる実力者。しかし、ここで大切な事に気付いた。
（あれ・・極・・使えないんじゃね・・）
　そう、今は翼も二課の人間も見ている。誰が二番目と繋がっているかがわからない今、正体をバラすのは下策でしかないのだ。よって、
（蔓も使えない・・！だが！）
　そう、バラすのは下策だが、
（バレなきゃいいんだよ・・どこかの混沌が言ってただろ。・・バレなきゃ犯罪じゃないんですよ・・）
　要するにバレたらマズイのだからバレないようにすればいいのだ。ので、
「アヴァロン‼？」
『はいな！マスター！』
　その瞬間アヴァロンが強烈な光を放つ。アヴァロンはその光に人間が見ると必ず見えなくなるような光を混ぜる。
「むぅ！」
「クッ！」
「ガァァァ・・」
　皆が視界を奪われた一瞬の隙を抜い、神の力を発現して響に近づき胸の中に手を突っ込む。そして、響の中にある響を侵食するガングニールの欠片をシンフォギアを纏うのに必要な量を残して、取り除く。光が止む頃には、暴走が解けた響が気を失い憐の腕にもたれ掛かっていた。
「弦十郎さん・・響を・・」
　憐が何かを弦十郎に言いかけた時だ。不意にクラックが開く。響を除いた全員がクラックを見る。しかし、考えていることまで一致はしなかった。
　憐は疑問
（あれ、うちのクラックだよな。何かあったのか？）
　翼は復讐心

（あれは、二年前の！奏を襲った！）
弦十郎は興味
（あれは・・二年前に確認されたものか・・）
カリバーンとアヴァロンは確認
（（マスターが警戒していないからあれはヘルヘイムの方ね））
皆が見ている前でクラックの中から異形の怪物が出てくる。オーバーロードであるマキシムだった。
「お・・」
憐はマキシムが呼ぼうとするのを誰にも見えないように手で制する。マキシムはそれを見て理解し改めてどうするかと考える。しかし、それより先に憐が叫ぶ。
「何者だ！」
マキシムは憐の意図を汲み取り返事をする。さぁ、茶番といこうか。

神としての降臨

さぁ、茶番といこうか。
「俺はマキシム！インベスの中で最上級のオーバーロード！」
「オーバーロードだと！」
「そうだ！我々、オーバーロードは王の命によりそこにいる鎧武！我と来てもらおう！」
〈オレンジ！〉
「変身！」
〈ソイヤッ！〉
〈オレンジアームズ！花道オンステージ！〉
　憐はベルトにオレンジロックシードをはめ込み鎧武に変身する。
そして、大橙丸を構えて叫ぶ。
「断ると言ったら！」
「ならば、力ぞくでも連れて行く！」
　その瞬間に鎧武とマキシムが激突する。マキシムの戦い方は拳。剣より鋭く弾丸より速い、最強の拳。その拳と大橙丸が激突する。その瞬間、鎧武が吹き飛ばされた。
「ガッ！」
「脆い！脆いぞ！鎧武！その程度の力で我に刃向かおうとするなど片腹痛いわ！」
　鎧武は転がる体を大橙丸を地面に突き刺し止める。
「憐私も！」
　翼がそう叫ぶが鎧武は
「こいつらはシンフォギアじゃ無理だ。言っちゃ悪いが！シンフォギアは対ノイズ様の兵器！こいつらに対しては唯の玩具でしかない！」
「そんな・・」
　翼はその言葉を聞いて落ち込むが鎧武とマキシムが戦っているのを見て自分が入れる余地が無い事を自覚する。その間にも鎧武は押されていく。
「クッ！オレンジじゃ無理だ！でも、これなら！」

〈カチドキ！〉
〈ソイヤッ！カチドキアームズ！いざ！出陣！エイ！エイ！オー！〉
鎧武はカチドキアームズへと変化し背中からカチドキ旗を抜きマキシムに振り下ろす。
「はぁ！」
「グ・・やるな！」
「当たり前だァァァァァ！」
鎧武はカチドキ旗を一回転させる。すると、炎が飛び散り鎧武の周りだけスローになる。マキシムはその勢いで宙に浮くがスローになっているので宙に浮いたまま止まっているように見える。鎧武はマキシムにカチドキ旗を思いっきり叩きつける。マキシムは、避ける術もなく吹き飛ばされる。
「あぁ、楽しいなぁ！鎧武！」
「ああ、楽しいぞ！マキシム！」
「憐？」
様子のおかしい憐を見て翼は不審に思う。憐はこんな好戦的な性格ではなかったはず。なのに、今憐は闘いを楽しんでいる。そんな翼に気付かず鎧武は闘いを激化させる。
「さぁ、血沸き肉踊る闘いを始めようか！」
「応とも！」
鎧武はカチドキ旗をなおし、拳で突っ込む。マキシムもそれに答え、拳で突っ込む。両方の拳が激突、辺りに衝撃波を撒き散らす。鎧武は突き出された拳を掴み、クラックの方へ投げる。飛ばされたマキシムはクラックの中に消える。鎧武もそれを追ってクラックに飛び込む。
「憐!?？」
翼が慌てて追いかけるが、鎧武が飛び込んだ瞬間にクラックは閉じてしまう。クラックの中に入った憐は拳を構えたままマキシムと睨み合う。そして、今までとは比べ物にならないくらいの速度を出し激突・しなかった。拳を相手の直前で止め、構えを解いたからだ。
「いやー楽しかったな。王様」

「そうだな。二番目と戦ういい準備運動になった」
「あれが、準備運動かよ。本当に強すぎぎるだろ」
マキシムは結構全力に近い力で戦ったのだが、憐にとっては全力とは程遠い程の力で戦っていたことにマキシムは分かっていたとは言え少し落ち込む。マキシムが落ち込む中、憐は『はじまり』へと姿を変える。そして、お面を取り出し付ける。
「ん、王様？なにしてんだ？」
「王としての俺も姿見せとこうと思って。でも、顔バレはマズイからお面つけてる」
「なるほど・・という事は」
「ああ、散々やられ放題だったが俺たちも出る。宣戦布告だ」
「全員に伝えるのか？」
「いや、取り敢えずはオーバーロード達に頼む」
「御意に、王様」
そう言ってマキシムは飛び去ろうとするが直前で足を止め憐に伝言を伝える。
「王様！姫様からこれ買ってきてって」
伝言と共に紙を渡す。憐はそれを受け取りながらぼやく。
「へいへい。了解ですよ。しかし、量多いな」
「じゃ、しっかり伝えましたからね」
マキシムは今度こそ飛び去る。憐もクラックを開けて戻る。今度は王として、神として。
「憐・・」
クラックの中に入っていた憐を翼は心配するが、それより先に上空にクラックが円状に開く。
「憐？」
翼は憐が帰ってきたのかと思い嬉しくなるがその思いは砕かれることになる。そこから出てきたのは翼には苦い思い出のある光の果実。その事に源十郎と翼は思わず叫ぶ。
「「あれは！」」
光の果実は宙に浮き光を取っ払う。そこから出てきたのは

「人？」
　そう、そこから出てきた人らしきものは髪は金色、肌は人間と同じ肌色。背丈も普通の青年と変わらないぐらいであろうか。違うところは、仮面を付けていてその隙間から見える瞳が金色に光り、体には戦国時代のような鎧を纏っている。その鎧に翼は見覚えがあった。
「南蛮風の甲冑か・・」
　そこで初めてその男が言葉を発する。
「違う」
　低く厳かな声だった。その声には何物にも抗うことのできない絶対強者の威厳があった。
「日本で作られた南蛮風の甲冑は我を見て作られたものだ。我が真似たのではなく、奴が真似たのだ」
　その声に抗うように翼は声を出す。自分でそう思っているだけで全然抗えていないのだが。翼は今まで光の果実と遭遇した場合は即座に斬りかかろうと思っていたのだが、その気持ちは見た瞬間に霧散してしまっていたからだ。
「貴方は、二年前のライブを覚えていますか？その日初めて私達は貴方を目撃しました。私はその日大切な人を失ったのです！」
「二年前のライブ・・ああ、弱者が強者になりそこないである神もどきに抗っていたあのライブか・・あの程度に手こずるようなら死んでも仕方がない」
「強者になりそこないである神もどき？」
　源十郎は憐の言ったある言葉に注目するが翼はそれに気づかない。
「違う！奏を殺したのは貴方だ！奏はあの日絶唱を歌いその命を燃やした！それを貴方が光る果実の中に取り込んだのではないか！」
　憐は痛む心を無視し言葉を返す。
「はぁ・・何を言っているのだ？その奏とやらは自ら命を燃やしたのだろう。ならば、それは自殺であって我のせいではないように思うが」
「違う！違う！違う！奏は助かっていたんだ！あの時直ぐに治療すれば助かっていたんだ！それを・・」
「思い出したぞ。奏という奴はあの赤い少女の事だな。いやはや、あ

の状態からの治療はこの世界の医療では不可能であろう。ましてや、人として死ぬのは我にも防げない」
「・・・・・」
弦十郎は憐の言葉を聞き何か考えているようだが翼は狂乱していて聞こうともしない。
「うるさい！うるさい！うるさい！私には奏が居ないとダメなんだ・・それを貴方が奪った！私は貴方を許さない！」
そして、翼はアームドギアを構え走り出す。
「よくも奏をぉぉぉぉ！」
それを見た憐はため息を吐き、手を伸ばす。
「本来、この力は弱者を護るための力。その力も同じはずだ。それを自らの私怨で使うなど言語道断」
すると、彼方此方から蔓が伸びて翼の足を拘束する。そして、そのまま地面に向かって投げる。吹き飛ばされるが翼の着地点には蔓を使って作った即席クッションが作られており翼の勢いを吸収する。体中に絡まった蔓を引きちぎり憐に向かおうとするがそれより先に憐が光の波動を放つ。
「少し眠れ」
光を受けた翼は崩れ落ちる。弦十郎は倒れた翼に近付く。
「安心しろ。眠っているだけだ」
「そのようだな。しかし、君は何者なんだ？」
「我は『はじまりの男』貴様らが見たインベスの王でありこの世界の神だ」
弦十郎が口を開く前に憐は答える
「我は人間の味方でありたいと思う。だが、我は人間の汚さをよく知っている。それをどうするかは人間達次第だ」
「協力はしてくれないのか？」
「言ったであろう。人間次第だと。現に我の世界にも住んでいる人間は存在する」
「なんだと⁉？」
「安心しろ。何もしていない。ただ住んでいるだけだ」

「安全なのか？」
「我の庇護下であるからな」
「ならいい」
「ふむ。貴様らは信頼してもよさそうか・・」
「協力してくれるのか⁉？」
「・二番目との戦争を邪魔しなければな」
「ありがとう・・」
　憐はクラックを開けて向かう。
「帰るのか？」
　弦十郎が聞くと憐は素直に答える。
「いや・・近くのスーパーまで晩御飯の買い出しだ」
　その瞬間空気が凍った気がした。
「随分庶民的だな・・」
「同居中がよく食べるのでな生地の元とソースの買い出しだ。あとは、米とかな」
　そこで、弦十郎は何かに思い至ったのか憐に聞く。
「因みに今日の晩飯は？」
　憐は軽く笑いクラックを閉じながら答える。
「お好み焼きだ」

共闘

今ら響は二課のベットで寝ていた。その横に憐は座り響の看病をしていた。
『ごめんなさい・・マスター』
アン（アヴァロン）の声も落ち込み沈んでいる。そんなアンに憐は声をかける。
「まぁ、いい。結果的には無事だったわけだし。それに忘れることだってあるさ」
そう言ってアンの体（鞘）を撫でる。
『ごめんなさい・・』
「謝るのなら響に謝れ」
『うん・・』
『全くアンも何処か抜けているんだから』
『リンには言われたくなかったわよ』
『ちょ・・それは・・』
「そうだな」
『マスターまで！』
そんなことをしていると響が目を開けた。
「う・・ここは？」
「気付いたか。響」
憐は起き上がろうとする響をねかせる。
「起きるな。響。寝とけ」
「どう・・なったの？」
「・・胸にあるガングニールの暴走だ」
「そう・・ですか・・」
「ごめん・・また、守れなかった・・」
「うんうん・・憐さんは・・私を・・いつも・・助けて・・くれたよ」
「もういい。寝ろ。次に起きた時元気だったら、どっか出かけようか」
「ホント⁉？」

「ああ、勿論だ」
「寝る！すぐ寝る！」
「おう、おやすみ」
　響が寝静まったのを確認すると憐は立ち上がり二課から貰った物とは別のデバイスを操作する。そして、クラックを開けて中に入り目的の場所に移動する。身体を「はじまりの男」に変化させ、クラックから出る。その場所とは。
「自分の墓を集合場所とは洒落とるなぁ。憐君」
　そう。憐と両親の墓であった。そこにやってきてはじまりの男の状態にも関わらず憐と呼んだのは
「やっぱり気付きましたか。弦十郎さん」
　二課の司令官、風鳴弦十郎であった。
「流石にあそこまでわかりやすいヒントを出されればなぁ。わからんものも分かるというものよ」
「そうですか」
「それでこのメールで俺を呼び出したのは何故だ？」
　弦十郎は自分の携帯を憐に見せる。そこには憐が行く前に打っていたメールが表示されており、こう書かれていた。
『二課の司令官と二人だけで話がしたい。葛葉家の墓のある場所で待っている。勿論、この事は誰にも話すな。
　ヘルヘイムの王より』
　それを見て憐は素直に答える。
「出来れば、俺たちの事を教えておいたほうがいいと思いまして。響が弦十郎さん達に向かってトップがわからんのに言うことなんて聞けるかって言ったのに俺たちだけ秘密というわけにもいかんでしょう」
「なるほど‥で、憐君達はどう行動するんだ？」
「俺達は俺達の敵と戦います。ですが、その敵が貴方たちの戦う、ノイズの大将の共闘している可能性があるのでそれに対抗する為には俺達も共闘するのがいいかと思います」
「なるほど‥だが、敵とはなんだ？」

「それについてはまず俺達の事を知ってもらわないといけません。俺達は「はじまり」人が人としての暮らしを始めた最初の人類」
「?・・要するにアダムとイヴか?」
「そう思ってもらって構いません。物語でそこに出てくる龍の護る「黄金の果実」それを食らって神となった人間。それが俺達です。そして、俺達の敵が生まれるはずのなかった人類を滅ぼす『二番目』それが俺達の敵です」
「・壮大な話だな。響君はこの事を?」
「知っています。あのライブの後酷い虐めにあって居たのを俺が保護しましたから。立花家は全員居ますよ」
「他に居ないのか?」
「はい」
「そうか・他に言っておきたいことはあるか?」
「それじゃあ一言だけ。俺は俺達は確かに人を護ろうとするが家族を傷付けた場合は人を殺すことに躊躇いはない」
「何故か聞かせてもらえるか・」
「昔、大勢の人間に響は虐めを受けていた。俺の家族を・響を集団で暴力を振るった挙句トラウマどころか、それから響はこちらの世界を来るどころか見る事さえ出来なくなった!今日の暴走もそのトラウマが原因だ!響は『人殺し』と言う言葉を聞くと精神が不安定になる。その不安定になった所をガングニールが埋め尽くす。破壊衝動でな!俺は確かに人類を救うと決めているが先代と同じで家族を傷付けられて黙っている程お人好しではないのでね!そんな事があれば問答無用で殺らせてもらう!」
「そういう事だったのか・だが!その時は俺が止めてやるよ」
「やってみろ」
　そう言って二人は笑いながら手を握る。
「俺達と共闘関係を結んだ事は全員に伝えてもらっても構いません。だけど、俺の事は秘密にしておいてください」
「了解だ」
　そこで憐は核にも匹敵する爆弾を落とす。

「それと、恐らく二課に裏切り者がいます」
「なんだと⁉？」
「こちらの情報が漏れている可能性も否定できません。その事を常に頭に入れておいてください」
「そうか・・余り疑いたくないものだがな」
「そうですが、現に俺達のスパイは二課に存在します」
「何‼？そうか・・だから、憐君達がシンフォギアの事を知っていたのか・・」
「それもあります」
「それも・・とは？」
「言えません」
「どうしてもか？」
「どうしてもです・・それじゃあ」
　そう言って憐はクラックを開ける。そして、中に入ろうとするのを弦十郎が止めた。
「待て！」
「なんですか？」
「天羽奏と言う人物を知っているか？」
「・・翼の相棒だった歌手の人ですか」
「そうだ・・二年前のライブの惨劇の時に亡くなった少女だ。前に憐君は奏で君のことをこう言った。『人として死ぬのは我にも防げない』と。まるで人としては死ぬが人であることをやめたら、生きていられるかの様に」
「・・・・・天羽奏は死んだ。俺にできるのは命を産み出すことであり生き返らせることじゃない」
「そうか・・治療が不可能とは言わないんだな」
「・・・・・」
　憐は何も発しないままクラックの中に入る。弦十郎にとって沈黙は何よりの答えだった。しかし、
（恐らくだが、奏君は生きている。だが、憐君はそれを隠そうとした。となると、余り言いふらすのは得策ではないか。仕方ない。自分で言

うまで何も言わないことにしよう）
弦十郎はＯＴＯＮＡであった。

一方響の方へと戻った憐に一件の通知が届いた。
「？弦十郎さんから？」
その内容は
『響君をリディアンに通ってもらおうかと思うのだがどうだろうか？リディアンだと我々とも連絡などが可能になるし、その他の食費、学費などは我々が持とう。可能ならば寮にも入ってもらってもいいぞ』
「さて・・どうするか・・」

リディアン

　響は憐と二課に頼まれた事について話していた。それは・・
「別に二課に言われた通りにリディアンに通わなくとも良かったのに」
　そう、響は目の届きやすい二課の隠し蓑である、私立リディアン音楽学院に通う事となったのだ。
「うんうん、リディアンだと二課の人が学費払ってくれるらしいから。憐さんには今、学校に通えるばかりか家まで貰ってそれだけで十分！これ以上は迷惑かけられないよ」
「気にすんな。あの時俺の所に来れた響への神様からご褒美だと思っとけ」
「初めて会った時はまさか本当に神様だとは思わなかったよ・・」
「まぁ、そこまで明るくなって良かった」
「エヘヘ・・」
「これは俺からの餞別だ。なんかあった時に使え。シェムザム達が全力で助けに行くと思うから」
　そう言って渡したのはレモンエナジーロックシードとチェリーエナジーロックシードだ。
「レモンがシェムザムでチェリーがマキシムな」
「これに師匠達が・・ありがとう！憐さん！」
「行ってこい！戸籍等は変えてあって隠せるとは思うが響と仲の良い人が居たら姿は変わってないから気を付けてな」
「はい！行ってきます！」
　だが、憐に背を向けた響の顔は暗いものだった。学校という昔の虐めの現場。憐も居ない。必然的に響の顔は暗くなる。そこで、憐の持つ二課から貰ったデバイスが鳴る。それに響も足を止めて憐を見る。
「はい。もしもし葛葉ですが」
『おう。憐君か。弦十郎だ』
　かけてきた相手は弦十郎であった。

「で、どうしたんですか？響ならリディアンの用意をしていますよ」
『そうか、二人とも来てくれるか・・』
今、重大なすれ違いがあった気がする。
「二人とも・・？」
『む・・当たり前だろう。憐君も来るのだろう』
「はぁ！俺は通いませ・・」
その瞬間、響が憐の手を握る。
「響？」
「憐さん・・一緒に行こ？」
響の上目遣いアンド涙目＝負け確定。
「わーったよ。弦十郎さん。俺も通うわ」
『そうか！助かるぞ。制服は来てから渡すから取り敢えず来てくれ』
「了解」
通話を切ると響が一気に明るくなりワクワクした顔で憐を待っていた。
「憐さん！」
「はいはい。行こうか」
「はい！」
そう言って二人は扉を開ける。二人の手は握られたままで、楽しくも不安な響と憐の初めての高校生活の始まりだった。

学園に着いた憐は響を下ろし乗っていたサクラハリケーンをロックシード状に戻す。先に降りた響は憐の手を掴み、入学手続きのために職員室へ向かう。職員室らしき部屋の前に着くと憐と響は決心して扉を開く。（響は一年とちょっと振り。憐は中学校に通っていないので三年振りになる）
「失礼します。転校の手続きに来たんですが・・」
「はいはい。二人はこっちにおいで」
二人を呼んだ男性は先日二課で見かけた男性だった。
「えっと、僕の名前は『佐々木　大成』だよ。憐君はこの制服を着て欲しいのとこの書類に署名してくれるかな」

「了解です」
「えっと、私は？」
「響君は特にないかな。憐君が全部やってくれているから」
「・・・・・・・」
　響は未だに憐の世話になっている事を自覚し少し落ち込むがそれを察した憐が響の頭を撫でる。
「憐さん⁉？」
「気にすんな。気にするんだったらこの借りは大人になったら返せ」
「憐さん・はい！」
　その完全桃色空間に職員室にいた職員全員がブラックコーヒーを飲む。そして、職員達の心は一致した。
（（（（（（甘い・甘すぎる！口から砂糖吐きそう・））））））
「っと、これでいいですか？」
「・うん。十分だよ。これで二人はこの学院の生徒だよ。憐君はリディアンの共学に向けた試験的な生徒だと思ってね」
「了解です」
　そう言って、佐々木さんは立ち上がる。
「憐君は僕の担当のクラスで響君はあの人が担任だよ」
「う・気の強そうな人・」
　自分の担任をみた響が思わずそう漏らすほどその人は確かに気の強そうな人だった。
「頑張れ。響」
「うぅ・頑張ります・」
「じゃぁ、お昼休みに行くから。また、後で」
「絶対ですよ！絶対ですからね！」
「はいはい。絶対だ」
　そこで二人は別れる。憐はそのまま佐々木先生について行き、響は自分の担任のところへ行く。
　響は担任に挨拶をするとそのままクラスに連れて行かれ教壇の前に立っていた。
「葛葉さん。挨拶を」

響は沢山の目線が自分に向かっているのを自覚し、緊張する気持ちを振り絞り自己紹介を始める。
「葛葉響です！趣味は人助け！好きな事は人助け！やりたい事は人助けです！よろしくお願いします！」
クラスからよろしくお願いしますとの返事が一斉に帰ってくるのを聞き少し安心する。
「葛葉さんは・・あの小日向さんの横の席ね」
「はい・・小日向？」
響が不審に思いながらその席に行くとそこに居たのは
「未来・・」
「響・・」
私の幼馴染『小日向　未来』だった。
一方その頃憐は佐々木先生が先に教室に入り連絡を伝える。
「今日、転校生が来ています」
その情報に生徒達は声を上げる。
「えー！先生！今ですか？」
「はい。特例です」
「可愛いですか？」
「さぁ、それはどうでしょう」
「この中に知っている人はいますか？」
「どうでしょうねぇー」
「先生！」
「先生！」
「先生！」
「うるさいぞ！」
生徒達の声を一声で黙らせる生徒が居た。
「何故ですか？翼さん」
翼である。
「たかが転校生などにいちいち声を上げる必要がありません」
「なるほど・・では、カーテンを閉めて」
佐々木先生は含み笑いを浮かべる。今回の為に特別に設置された

カーテンを閉めて扉から教壇を横切るように窓まで配置する。扉が開き、憐が入っていく。教壇の前に立つと後ろからバックライトを当てる。すると、カーテンには憐のシルエットが浮かび上がる。それを見た生徒の反応は
「髪は長いわね」
「結構身長高いわよ」
「運動してそうな体付きね」
　そこで佐々木先生が憐に声をかける。
「では、転校生さん。挨拶を」
「はい」
「綺麗な声ね」
「そうね。確かに綺麗な声ね」
「私は9月23日生まれです。好きな物は・・そうですね、強いて言うなら鳥肉でしょうか。嫌いな物は特にありません」
「はい！はい！好きなアーティストさんはいますか？」
「風鳴翼さんです」
「その人ならこのクラスに居ますよ」
「えー！本当ですか！嬉しいです。昔お会いして一緒に遊んだことがあったんです」
「へーそうなんですか」
「風鳴さん。そう言っていますけど・・」
「知らん。私には覚えがない」
　覚えてないという翼に憐が
「本当に覚えていませんか？」
　再度聞くが
「くどい！知らん！」
　まぁ、それも仕方ない。今の憐はウィッグを着けて声まで変えているのだ。普通ならわからない。
「どうしましょう？佐々木先生」
「もう、見せてもいいじゃないですか」
　憐と共に後ろに隠れている佐々木先生は笑うのを我慢していた。

それも結構ガチで。

「そうですか。私の愛しの翼さんは私のことを知らないんですからね」

「誰が愛しの翼さんだ！もういい！顔を見せてみろ！」

「だったら、翼さんがこのカーテン開ければよろしいのでは？私は開けた先にいますので」

「上等だ！その顔を拝んでやる」

そう言って、翼は階段を降りて教壇の光が消えてシルエットが見えなくなった転校生のカーテン前に立つ。そして、思いっきり、カーテンを引きあける。

「一体、誰・・だ・・」

「全く、俺がわからないなんて残念ですわ。翼」

翼はその姿を見て絶句する。他の生徒も別の意味で絶句するが、一人が声を漏らす。

「男・・」

「おう！転校生、葛葉憐！よろしく！」

その瞬間

「「「「「「キャァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」」」」」

黄色い声が響いた。それも学院中に響き渡るぐらいの声で。

「男よ！男！」

「しかも、カッコいい！イケメンの転校生よ！」

「しかも、風鳴さんの知り合いですって！」

憐は驚き過ぎて腰が抜けている翼を抱き上げる。お姫様抱っこで。

それを見た生徒達は勿論

「「「「「「キャァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」」」」」

叫びだすが当事者達は、と言うか翼はそれどころでは無かった。顔を真っ赤に染め

「憐⁉？・ちょ！降ろして！降ろして！」

そう叫ぶが

「降ろしていいのか？」
「‥やだ‥」
「「「「「「「キャァアァアァアァアァアァアァアァ！」」」」」」」
「あの！あの！孤島の歌姫の風鳴さんが！あんなに！あんなに塩らしく！」
「孤島？」
「ええ！誰とも仲良くしようともせず！」
「私は一人だ。と言って！」
「近付く者を追い払い！」
「トップアーティストとして！」
「そしてついたあだ名が！」
「歌姫として！」
「孤島の歌姫！」
それを聞いた隣は翼を降ろす。
「翼、正座」
「いや、憐。流石に人前‥」
その怒気にクラスが静まり返る。
「正座」
「いやでも‥」
「‥折角家の合鍵渡そうと‥」
「私が悪かったです」
「「「「「速ッ！」」」」」
憐が言い終わるまでに立っていた状態から完璧な正座をするまでコンマ0．1秒。そのあまりの速さに生徒は勿論、佐々木先生でさえも驚く。憐は正座した翼に近寄り手を頭の上に置く。
「憐？」
憐は生徒達の方を向いて一つのお願いをする。
「今まで翼は孤島の歌姫だったのかもしれない。誰とも仲良くせず、一人で生きていけるような強い人間。でも、本当のこいつは寂しがりやなんだよ。だからどうか、翼はトップアーティストで自分とは違う、上の存在だなんて思わないでほしい。翼は俺達と変わんないんだ

よ。ちょっと泣き虫ですぐ拗ねたりする唯の可愛い女の子だ。勿論、アーティストの面でも褒めてやってほしい。あの曲が良かったとか、あのライブ凄かったとか。それが、俺からの頼みだ。頼む」

　憐のその頼みに生徒達から声が上がる。

「勿論です」

「確かに、今まではそう思っていましたけど」

「葛葉さんとのやり取り見てたらねぇ」

「女の子だよねぇ」

「だから、」

「「「「「「私達と友達になりませんか？」」」」」」

　憐はそれを聞き翼の頭を少し小突く。

「いいクラスじゃねぇか」

「ああ、私もそう思う」

　翼は立ち上がりクラスに向かって頭を下げる。

「わたしからもお願いする・・」

「「「「「「喜んで！」」」」」」

　防人であり剣であった少女は変わろうとしていた。たった一人の少年によって。

ネフィシタンの少女とオーバーマリス

　憐達は夜ごはんを食べ終わりゆっくり休んだ後、翼は憐の家を出る。憐は玄関まで翼を送る。
「ありがとう。憐」
「気にすんな。また来い」
「うん。そうする」
「じゃぁ、またな」
「バイバイ」
　翼は帰って行く。その背中を見えなくなるまで見送った憐は扉を閉める。そしてテレビをつけて響と話す。
「今日の風呂はお前から・・」
　その瞬間二課からの連絡とヘルヘイムからの連絡同時に入った。憐はヘルヘイムにマリスや聖遺物の反応を探知できるような装置を作りヘルヘイムに置いていたのだ。そういうわけでヘルヘイムからの連絡を取り、二課からの連絡は響に投げ渡す。
「どうした？」
『憐！ノイズが出た！』
「なに!?ほかには？」
『ああ、遠くに識別名『ネフィシタン』の反応がある。それとクラック反応も』
「そうか・ついに来たか。オーバーロード達に通達！敵対するマリスに対しては一切の躊躇もせず倒せ！」
『了解！伝えておくよ！』
　一方響は
「はい！立花です！」
『響ちゃんか!?？憐君は？』
「一緒に居ますが・どうしたんですか？藤堯さん」
『なら良かった！ノイズが出たんだ！場所は○○○○。お願いします！』
「了解です！」

響は通話を切り、もうパーカーを羽織り外に出てサクラハリケーンを用意している憐の元へ向かう。憐は響にヘルメットを一つ投げ被らせる。そして、響を後ろに乗せ走り出す。
翼もノイズが出たという報告は受けていたが、場所までいかんせん距離がある。生憎走って行くには遠過ぎる。がかと言ってシンフォギアを纏うのもリスクが高すぎる。
「バイクを持ち運びできたらいいのだが・・」
そんな都合よく持ち運びのバイクなどあるわけが・・
「ある！」
そう、あるのである。最初に鎧武から渡されたが危険があるとして緒川さんが預かっていて鎧武の正体が憐とわかると返してもらったものが。
「これか！」
翼はカバンを漁り中から薔薇の意匠が施されたロックシードを取り出す。
「ええっと？確か・・掛け金を開けて上に軽く投げる・・」
翼は憐がやっていたもようにする。すると、ロックシードが変形してバイクであるローズアタッカーへと変化する。勿論、ヘルメット常備。その事に翼の口から思わず感嘆の声が出る。
「おお・・」
しかし、それもつかの間翼はローズアタッカーに跨り走り出す。
「凄い・・速いし、こちらの動きを良く反映してくれる・・これなら！」
翼は速度をさらに上げシンフォギア『天羽々斬』を纏う。
「Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ・・」
翼がそうして纏うとまだまだ余裕のあったローズアタッカーの上限が解放された。今、時速７０キロぐらいで走っているが解放されたローズアタッカーの上限は更に余裕ができた。
「まだ、速くなるのか・・凄まじい性能だな」
翼は恐らく風圧対策であろうと考えていた。そして、それは正解することとなる。翼はアクセルを一本道で誰もいないためにスロットを目一杯開ける。すると、遠かった筈のカーブがすぐ側になり前から

の風圧が凄い事になった。体を叩く空気それはシンフォギアの纏う防御壁をも超えてくる。取り敢えず翼は慌てて近くに来たカーブにハンドルを切る。すると、ローズアタッカーはこの速度であるにもかかわらず綺麗に曲がった。ひとまず落ち着いた翼はローズアタッカーのスピードメーターを見るするとそこには驚きの数字が出ていた。

「時速は・・２４５だと⁉?・」

それを見た翼は慌てて速度を落とす。それでも１５０はあるのだが。翼は最高速度はもう決して使うまいと心に決め現場に急ぐ。

先に現場に着いた憐と響はノイズを駆逐しだす。

〈オレンジ！〉

「変身！」

「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ・・」

二人はオレンジとガングニールを纏い、叫ぶ。

「ここからは俺（私）達のステージだ！」

「うおおお！」

「はあああああ！」

二人は叫びながらノイズを破壊していく。そうしていると翼が到着した。

「すまない！遅れた！」

「大丈夫だ！（しかし、このノイズ・操作されているか・）」

翼も加わりノイズを一気に殲滅していく三人。その瞬間何処からか、鎧武に向けて攻撃が放たれた。鎧武は寸前で気づき弾きかえす。そして、叫ぶ。

「鞭・・ネフィシタンの鎧か！」

「ネフィシタンだと！」

「へぇ！こいつ知っているのか！」

そう言って出てきたのは白い鎧に目の辺たりにはバイザーを付けている白髪の少女だった。

「当たり前だ！二年前に自分の不手際で失われたことを忘れるものか

！なにより・そこで失った命を忘れるものかアアアアア！」
翼は激昂しネフィシタンの少女に向かって突っ込んでいく。
「翼⁉？クソッ！」
鎧武も駆け出そうとするがそれより先にネフィシタンの少女が持っていた杖をこちらに向けてノイズを召喚する。それと共にインベス似の生物が出現する。
「マリスか・・」
鎧武の言葉にマリス達が返事をする。
「その通り！我々はオーバーマリス！」
「貴様らで言う！オーバーロードである！」
「貴様を殺しに来た」
「大人しく首を差しだせ！」
「いくらその力でもこの数のオーバーマリス達には勝てないでしょ」
オーバーマリス達の言葉に鎧武は首肯する。
「確かにお前らがオーバーロード達と戦闘能力が同じだというならこの数は少しキツイい・・だが、一つ聞かせろ」
「なんだ？」
「なぜ人を襲う？」
「「「楽しいからだ」」」
「私はネフィシタンの少女の為に」
鎧武はその答えに俯く。
「そうか・・だったら、一人を除いて俺は遠慮しねぇ！人を襲うのが楽しいなんて言っているお前らは絶対に許さねぇ！」
〈カチドキ！〉
〈カチドキアームズ！いざ！出陣！エイ！エイ！オー！〉
鎧武はカチドキアームズに進化する。その瞬間に鎧武の横にクラックが開きオーバーロードが４体出てくる。
「よう！鎧武！手助けしてやるぜ！」
マキシムがそう言い
「全く、王も困ったものです。人間と共闘するなど・・」
シェムザムが愚痴り

「甘いんだよな」
　アリゼンドが皮肉り
「まあまあ、それが王様のいい所だし・・」
　ローズが宥める。
「王の命令は絶対ですよ」
「わーてるよ。俺達、インベス陣営は人間を守る」
「サクラは？」
「姫様の側」
「了解」
　それを見た翼に弦十郎が連絡してくる。
『翼、オーバーロード達には攻撃するな』
「司令！どういうことですか⁉？」
『どうにもこうにも俺達はインベスと言われる陣営と共闘関係を結んだんだよ』
「何故ですか⁉？奴らは人類の敵ですよ」
『いいや、彼らは人類の味方だ』
　そこで翼はオーバーロード達の方を見るがそこに
「余所見とは余裕だなぁ！」
　ネフィシタンの少女が攻撃を仕掛けてくる。翼はそれを防ぎ離れる。
（強い！これが完全聖遺物のポテンシャル！いや！）
「聖遺物の差だけだと思うなよ！」
　そこで響が二人に話しかける。
「待って下さい！どうして、戦うべき相手は他にいるでしょう！なんで人同士で戦うんですか？何かズレがあっても人は言葉を話せるんだから、話し合いで解決しましょうよ！」
　翼とネフィシタンの少女は響の方を向いて睨む。
「「戦場で何を馬鹿な事を！」」
　そして、二人は向かい合い
「どうやら、貴女とは気が合いそうだ」
「だったら！仲良く殺し合う（じゃれ合う）かい！」

そうして、二人は戦闘を始めてしまう。
「あぁ！もう！」
それを見た響は毒づきながら召喚したノイズに突っ込んでいく。
響がノイズを殲滅している間、鎧武とオーバーロードはオーバーマリス達を相手にする。鎧武は取り敢えず翼が見ていないことを確認して役割を決める。
「俺が真ん中やるからローズ左端。シェムザム左の二番目。マキシム右端・・」
「なら、俺がアレか・・」
「そういう事」
「はいよ」
「了解よ」
「はい」
「手加減はするな。決して死ぬな。それだけだ。じゃ、行こうか！」
「「「了解」」」
そうして二つの陣営は激突する。鎧武は一体のマリスと戦う。鎧武はカチドキ旗を振りかざしながら話す。
「君はあの少女のために戦うと言ったな！」
マリスもそれを持ち前の剣で弾き剣を横に振りながら答える。
「そうよ！私は人間がどうなろうと知った事じゃ無い！だけど！友達が傷付くのは見ていられないからね！」
「クッ！なら！何故戦う？」
「それが彼女の願いだからよ！」
「願い？」
「そう！この世界から戦いを無くす！その為に敵を潰す！その願いの為に！」
「そんなので戦いがなくなるわけが無い！」
鎧武はカチドキ旗を円を描くように振る。すると、炎が飛び散り飛ばされたはずのマリスが宙に浮いたまま止まる。否、動いているだがその速度が遅すぎているのだ。満足に動けないマリスに鎧武はカチドキ旗を叩きつける。それをくらい吹き飛ばされるマリス。

「クッ！それでも！あの子が望むのなら！」
「望んだとしても！そんなやり方で戦いがなくなるわけが無い！力を無くす為に力を使うんだからな！そんなやり方で・・そんなやり方で・・上手くいく訳が・・」
　その瞬間、鎧武は気付いた。それにマリスも気付いた様で鎧武に聞く。
「気付いた？」
「そう言う・・そう言う事か！この世界を滅ぼす気か！『はじまり』と『二番目』を使って！」
「勿論、あの子はそんな事思ちゃいない。ただ、貴方達を倒せば戦争がなくなるとしか言われてないからね」
「確かに・・その方法だと戦争は無くなる。なにせこの世界のすべての命がインベス、マリスに変わって果実の保持者には逆らえないんだからな」
「その通りよ」
「そんなので戦争がなくなったと言えない！」
「あの子は戦場で親を失った！そして、自分自身も非道な目にあった！もう！そんな目にあって欲しく無い！それに世界中が変わったとしても！あの子だけは変わらないと主も約束してくれている！」
「そんな約束を守る奴が世界を滅ぼすとは思えない！」
「さっきから聞いてると自分に都合のいいことばっかり！人の気持ちも知らないで！」
「だからなんだ！」
「人の気持ちも知らないまま人の夢を潰す！そんなあんたがやっている事は偽善よ！」
　その言葉に鎧武は動きを止め俯く。
「偽善・偽善か」
「そう、偽善」
　オーバーマリスの言葉に俯いていた顔を思いっきり上げ言い切る。
「それでも、善だ！」

極

「人の気持ちも知らないまま人の夢を潰す！そんなあんたがやっている事は偽善よ！」
　その言葉に鎧武は動きを止め俯く。
「偽善・偽善か」
「そう、偽善」
　オーバーマリスの言葉に俯いていた顔を思いっきり上げ言い切る。
「それでも、善だ！」
「なに？」
「確かに！俺のやっている事は偽善かも知れない。でも！その偽善で救われる人がいるなら！俺は偽善だって言われても構わない！それが師匠から貰った『思うがままに守る！』それが俺の覚悟！それに、お前らの夢は夢と言えない！そんな夢で誰かを救えないし自分だって救われない！」
「勝手な事ォ！」
　そして、二人は激突する。互いが守るべきものの為に。
　翼は苦戦していた。相手であるネフィシタンの少女が強く自分の戦いが出来ていないのであった。武器の相性もある。ネフィシタンの少女が鞭に対して翼は剣。相性的不利はやむを得ない。そこで翼はネフィシタンの少女がチラチラと横目で誰かを見ているのに気が付いた。
「ハッ！余所見とは余裕だな」
「のぼせ上がるんじゃねぇ！人気者！何時でも自分を見てくれると思うんじゃねぇ！」
　そこでネフィシタンの少女は新たにノイズを召喚する。召喚されたノイズは響の方へと向かう。
「あぁ！なんで！こっちばっかり！」
　ノイズは響を囲み口から拘束液を吐き出す。
「キャァァァァァ！」
　響はノイズの出した粘液に捕まる。その光景に鎧武は思わずとど

まる。其れを隙と見たオーバーマリスが突っ込んでくるが、鎧武はそちらを見もせず迎撃する。
「なんか・・エロい」
「じゃなくて！助けてくださいよ！」
　ネフィシタンの少女が拘束された響を見ながら
「私の目的は其奴だ！そいつを攫ってくることだ！」
　そう言うと、響をみた他のオーバーマリス達が嘲る。
「攫うのかよ・・どうせ体が残っていたらいいんだろ。殺して攫う方が簡単だろｗｗｗ」
「確かにその方が簡単だし人間（ゴミ）に生きる価値はないなｗｗｗ」
「その通りｗｗｗ」
　その瞬間、彼らは決して触れてはいけない優しき神の逆鱗に触れた。鎧武が放ちだした膨大な殺気にオーバーマリス達とノイズは動けなくなる。その殺気に味方であるオーバーロード達すら戦慄する。ネフィシタンの少女と翼は殺気による重圧に立つどころか呼吸さえ困難になる。それに対して響は飄々としている。
「・・覚悟しろ・・てめぇら。ぜってーに生きて返さない・・」
　そこで鎧武はカチドキとはまた違う、沢山の果物が描かれたロックシードを取り出す。それは禁断の力を開く鍵。最強の力を得るための鍵。極ロックシードを。それを見たオーバーマリス達は慌てる。
「あれは・・まさか！」
「へぇ、あれ使うのか・・マズイな　」
「どうする？」
「どうすると言われても・・」
　それに対してオーバーロード達は他には聞こえない声で
「遂に・・遂に使うのか・・」
「見れるぞ！王の本気を」
「俺達が惚れたあの強さを！」
　翼は騒つく両陣営に不審に思う。
「なんだ？あれがそんなに凄いものなのか？」
　ネフィシタンの少女は同じことを考えていた。

（あれが・そんなに警戒するものなのか？お見舞いの果物が描かれただけだろうが。お見舞いしたこと無いけど）

響は興奮する。

（久しぶりに見る！・憐さんの本気の姿！）

周りが騒然としている事には一切反応せず鎧武は極ロックシードを起動させる。

〈フルーツバスケット！〉

その音声と共に鍵部・ロックルートがせり出し、上空に大量のクラックが開きその中から、オレンジ・バナナ・ブドウ・ドングリ・マツボックリ・ドリアン・クルミ・メロンエナジー・レモンエナジー・チェリーエナジー・ピーチエナジーのアームズが出現する。そして、極ロックシードを起動した事によってカチドキロックシードの横に出現した鍵穴のような部分に差し込み回す。

〈ロックオープン！〉

極ロックシードとカチドキロックシードが開く。そして、１１個のアームズが鎧武の周りを回転し始める。

〈極アームズ！・大！・大！・大！・大！・大将軍！〉

すると、周りを回転していたアームズが鎧武向けて一斉に集まる。鎧武にアームズが集まるとカチドキの装甲が弾け飛ぶ。中から出てきたのは全身を南蛮風を模した鎧で包み、背部には防御に使用可能な内側は赤で外側が黒のマントを纏う。胸部にはオレンジ・イチゴ・スイカ・バナナ・ブドウ・メロンといった６種類の果物が描かれている。兜は前立てが鎧武の紋章を模した形状へと変化し、瞳は虹色に染まる。極ロックシードとカチドキロックシードのシードインジゲーターにはカチドキロックシードの方にオレンジ・パイン・イチゴ・スイカ・夕張メロン・レモン・ピーチ・チェリーの断面（基部側）と左側を向くカチドキアームズの顔（カバー側）が表示され、極ロックシードの方にはオレンジ（カチドキ）・バナナ・ブドウ・マンゴー・キウイ・ドングリ・マツボックリ・クルミ・ドリアンの断面（基部側）と、右側を向く極アームズの顔（カバー側）が表示されている。鎧武の持つ最終最強形態『仮面ライダー鎧武　極アームズ』だ。

鎧武は極ロックシードを一回捻る。
〈大橙丸！〉
手元にオレンジの切り身のような刀。大橙丸を召喚する。これは鎧武、極アームズの持つ能力の一つ。全てのアームズの力を集結させた為に極アームズは全てのアームズの武器を使用出来るのだ。
そして、極ロックシードをもう一度捻る。
〈メロンディフェンダー！〉
次に召喚したのはメロンを模した盾だ。鎧武はそれらを構える。それを見たオーバーロード達は鎧武の後ろに下がる。響もノイズを振り払い下がる。
「かかって来いよ。雑魚ども」
「なめるなぁ！」
鎧武の挑発に突っ込んでくるオーバーマリス達。だが、鎧武は全員相手にしているにもかかわらず余裕で立ち回る。例と言えば、
「くらえ！」
剣を振り下ろしてくるオーバーマリスには半身でよけ大橙丸で切り裂き、避け切り裂いたところを狙ったオーバーマリスにはメロンディフェンダーで防ぎ、腹を蹴り飛ばす。さらに、近づいてきたやつには切り裂いて怯ませ相手の体を駆け上がり肩を両足で踏み顔に右足で蹴りを叩き込む。
「…北斗昇雷脚（ボソッ）」
やってみたかったのだ！主に作者達が！最近北斗の拳にはまったからなぁ！
そして、武器を両方投げ捨て手を交差するように回転させる。すると、身体から金色のオーラが立ち昇る。そして手に金の光が集まるのを感じると手をそろえ突き出す。光は金色の光の奔流としてノイズに向かって撃ち出された。
「…天将奔烈」
それをくらったノイズ達はチリも残さずに消滅する。そして、その余波をくらったオーバーマリス達は吹き飛ぶ。
「凄い・・」

それを見た翼は驚く。大量に居たノイズ達を一撃でチリも残さずに消しとばしたのだ。普通に出来ることではない。しかし、憐はそれを呼吸するようにおこなった。惚けている翼にネフィシタンの少女は攻撃し吹き飛ばす。
「グゥゥ！」
ネフィシタンの少女はオーバーマリス達に声をかける。
「お姉ちゃん！」
声をかけられたオーバーマリスは鎧武の攻撃をギリギリで避ける。
「クリス！一旦退くわよ！」
「どうして！」
「極には全員でも勝てない！対抗するには主でないと！」
「そんなに強いのかよ・・」
「ええ！極は『はじまり』。世界最強の力よ！」
そう言いながらオーバーマリス達は逃げようとするがそれを逃す鎧武ではない。
「先にクリスは逃げなさい！」
「そんなことできるわけないだろ！」
「逃げなさい！ネフィシタンの鎧は必要な物よ！」
「クッ！分かったよ！帰って来いよ！」
クリスと呼ばれたネフィシタンの少女は背を向けて逃げようとするが、
「動かない！」
動かなかった。クリスの影には一つの小太刀が刺さっていた。
《影縫い》
「逃すわけないだろう」
「出来損ないが！」
「確かに私は出来損ないだ」
「この身を一振りの剣として鍛えてきたはずなのにあの日無様に生き残り、憐の時も力を手に入れ調子に乗っていたから大切な人を憐を失ないかけた」
「出来損ないの剣として恥を晒してきた」

「だが、それも今日までの事！そのネフィシタンの鎧が大切だと言うのならそれを取り戻す事でこの身の汚名を雪がさせてもらう！」
「そうかい！脱がせるものなら脱がさせてみろ！」
「ええ…月が出ているうちに、決着をつけましょう」
　クリスは翼の目を見て気付く。
「まさか、歌うつもりか！『絶唱』を！」
　その言葉に鎧武も響も叫ぶ。
「翼ァ！」
「翼さん！」
「防人の覚悟…生き様を見せてあげる！貴女の胸に刻みつけなさい！」
「やらせるかよ！好き勝手に！」
　だが、クリスは影縫いの影響で動けない。翼は剣を掲げて地面に突き刺す。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ：」
　すると、周りが紫色に染まる。翼は歌いながらクリスに近付く。
「退けェ！テメェら！」
　鎧武は近付こうとするがオーバーマリス達によって阻まれる。翼はクリスに抱きついて歌い終える。
「Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌ　ｚｉｚｚｌ…」
　クリスが見た翼の目は哀愁に満ちた目だったと言う。
『絶唱』それは、奏者が持つ最強最大の技。その代償は奏者の命。
　命の技（歌）が今、発動した。

本音…そして…

「翼！」
「翼さん！」
　鎧武と響は翼に駆け寄る。が、その足は止まってしまった。
「大丈夫です。防人の剣はこの程度で折れたりしません」
　振り向いた翼の姿があまりに悲惨だったからだ。口からは血が溢れ、両眼からも血が流れ、四肢が所々裂けている。とても見ていれるような姿ではなかった。翼は遂に崩れ落ちる。鎧武は止まっていた足を動かして駆け寄る。
「翼!?翼!?」
　鎧武は翼を抱き起す。そして、回していた手からバレないように禁断の果実としての力を使い治癒していくが、あまり効果を発揮しない。
「クソ！なら！…ごめん。翼…」
　鎧武は変身を解除する。そして憐はおもむろに翼の口と自らの口を合わせた。そのまま力をダイレクトに流していく。
「……」
　それを見た響は胸が痛いくらいに締め付けられた。たとえ、それが治療の一環だと頭ではわかっていても…だ。
（痛い…痛いよぉ…憐さん…）
「翼！」
　遅れて源十郎がやってきた。憐は口を離し翼を源十郎に託す。そして、源十郎に小さな声で
「俺の力で死ぬ事だけは回避した。あとは任せた」
「ああ・・」
　憐はサクラハリケーンを呼び出し跨る。響もその後ろに跨る。そして、憐はサクラハリケーンを走らせる。だが、家に帰るまで響は何も言わなかった。憐の浮かべる表情と自らの胸に残る痛みのせいで。
　家に着いた二人はクラックを通りヘルヘイムの森へと入り、響を家へ返して憐はヘルヘイムの森の中にある観測所に向かう。

「奏…」
そこで、ヘルヘイムの森で状況を把握していた奏に会った。
「憐…」
奏は何か言いたげな顔をしていたがそれを遮るように憐が口を開く。
「俺はダメだな…」
奏はその言葉に反論しようする。
「そんな事！」
「そんな事あるんだよ！」
憐の怒号に奏は驚いた。それは、二年間憐と一緒に居てきた奏にとって初めて聞く怒号だった。
「俺は！いつも遅れる！今回の事も！あのバレンタインデーの事にしても！お前…お前の事だって…俺は遅かった…」
「俺がもう少し早ければお前だってずっと翼や二課のみんなと一緒に居られた。助けるのが早かったら響だってイジメが行われずいつまでもクラスのムードメーカーとしてこんな戦いに巻き込まれなくて済んだかもしれない…何より今回はその場にいたにもかかわらず防ぐことができなかった」
「悔しいよ…俺だって悔しいよ!!こんな力（黄金の果実）まで持ってるのに！何一つ救えない！助けられない！間に合わない！紘太さんなら間に合った！俺は紘太さんを倒してこんな力を手に入れた。この力を持つ事で紘太さんにも出来なかった事をしよう。身近な人から助けて！いつか沢山の人を救えるようになろう！そう思って、今までやってきた。なのに…俺は何が出来た？何か出来たか？いいや、何も出来てはいない！やったことは間に合わず助けられた人の命を奪った事だけ。こんなの俺が紘太さんからこんな力（黄金の果実）受け継がなければよかった。紘太さんが生きていた方が良かった！俺が死ぬ方が良かった…」
それは二年間いや、力を受け継いでからずっと笑顔でいて愚痴一つ溢さなかった憐の偽らざる本音だった。そんな本音を聞いた奏は
「そうか…」
ただ、それだけだった。

「何も言わないのか？」
「言いたい事はあるさ。でも、今の憐には口で言うのは意味がない」
「？」
「と、思ったんだけど。やっぱり言わないと我慢できないし、憐の本音には間違ったことが一つあるからそれだけ」
「一つ？」
「ああ」
　奏は顔の横で人差し指を立てる。奏は悩み、悩みに悩んでいる憐の思いを
「あのライブまでの時にもし憐が間に合ってたする？正直、そんなＩＦの世界なんてどうでもいい」
　切り捨てる。
「考えることの無駄。憐の言う紘太さんなら間に合った？だからどうした。現実に遅れてでもやってきて助けてくれたのは憐だ！他の誰でもない。『葛葉憐』だ！同姓同名でもない！今、この瞬間に私の目の前に立ってる葛葉憐だ！事実、おかげで私は憐に救われた。その事だけでも憐は人を救ってる！」
「でも…」
「それに！あの笑顔は憐が作ったものじゃないのかよ！」
　奏は窓から見える響の顔を指差した。その笑顔はまるで向日葵のように明るく綺麗な笑顔だった。
「憐。前に私に言ったよな。例え、世界が敵に回っても私を護るって」
「ああ、言ったな」
　そう。憐は初めて奏や響の笑顔を見た時に誓った事がある。
『たとえ、この力が無くなったとしても。たとえ、ちっぽけな人間になったとしても。
　戦おう！
　この少女達の命と笑顔を守るために！

この命を掛けても！』

憐は忘れていた。この誓いは紘太さんに教えてもらったもので無く。自分でたてた自分だけの誓いだと言うことを。

それを果たさずして楽な方に逃げた自分を憐は恥じた。

「そうだ。そうだったな。俺は誓ったんだ。俺は必ず二人の笑顔と命を守るって。それは、誰のものでもない！俺だけのものだ！その役目を果たすことから逃げるわけには行かない！」

冷めた鉄（憐）は熱い炉（奏）によって熱を取り戻した。

さぁ、やられっぱなし、後手後手にはもう飽きた。今度はこちらから打って出よう。

二番目よ。なぜ、お前らが二番目なのか教えてやる。

俺たち（一番目）の方が強いから。

俺たちが最強だからだ。

せいぜい足掻け。そして、こちらは全てを救っていこう。

お前らも含めて

見舞い

翌日、憐はリディアンの地下にある二課の基地に行き源十郎にあることを伝える。
「源十郎さん。ちょっと俺は、ここを離れる。響の事頼めるか？」
「それは構わんが、何をするんだ？」
源十郎の問いに憐は不敵に笑い言った。
「なぁに、すべてを救うだけさ。戦闘力はあいつらの方が少し上だけどそれ以外は俺はチートなんでな」
その瞬間に憐は光を撒き散らしながら消える。源十郎は消えた憐を思い、漏らす。
「ちゃんと帰って来いよ。憐君」

そのころ、絶唱の影響により眠っていた。翼は夢をの中で真っ暗な闇の中に一人佇んでいた。
「ここは？」
「どうやら、無事の様だな」
翼はその声に思いっきり振り向く。その声はずっと聞きたかった声だった。
「奏…」
「おう。正真正銘、風鳴翼の相棒…いや、片翼、天羽奏さんですよー」

「ええ！憐さんが消えた!?」
響は源十郎から伝えられた事に驚愕する。
「どうしてですか！」
「わからん。だが、響君を頼むと言われた」
「そんな…」
響は落ち込みながら、外に出る。そこに、緒川さんがやってきて声をかける。
「響さん。これを」

「これは？」
緒川さんから渡されたのは一枚の新聞記事だった。その記事にはこう書かれていた。
『歌姫、風鳴翼　過労により入院！』
「緒川さん。これは、もしかして」
「ええ、情報統制は僕の仕事なんです」
「響さん。どうか、翼さんのことを嫌いに」
響は緒川さんの心配そうな言葉を遮る。
「なりませんよ。嫌いになんて。私達にも翼さんに隠してることたくさんありますから」
「ありがとうございます。しかし、隠している事とは？」
響は少し迷った後告げた。
「緒川さん。このことは、誰にも秘密にしてください。悟られてもいけません。質問も聞きません。それでも聞きますか？」
「聞かせてください」
「わかりました。では、翼さんの片翼」
緒川はここまで聞いた瞬間に察した。これから告げられる言葉を。
「天羽奏は『生きています』」

一方そのころ翼は夢の中で奏でと再会していた。
「奏…」
翼が近づこうとすると奏はそれを遮り、シンフォギアを纏う。
「奏？」
「翼、行くぞ」
その瞬間、奏は爆発的な速度でアームドギアを構え突っ込む。翼はギリギリでそれを避ける。
「奏！何するの！」
奏は肩に槍を担ぎ、翼を見る。
「翼。私は久々にキレてる。私が死んでからの二年間。それに今回の

絶唱。流石に堪忍袋の緒が切れた。」
奏が片手を翼に向ける。すると、翼のシンフォギアが勝手に起動する。それを見た奏は槍を構えて宣言する。
「その腐った根性たたき直してやる！」
次の瞬間、片翼同士が激突した。

「奏さんが…生きてる？それは、どういう事…」
「質問は無しですよ。緒川さん。時期にわかります」
そう言って響は去っていく。後には立ち尽くす緒川さんの姿があった。

それから数日後の朝
「昨日の夜に翼さんが目を覚ました!?」
「ああ、今日の午後には面会が可能だそうだ」
「では、午後にお見舞いに行ってきます」
「ああ、頼んだ。それと、シンフォギアを狙う奴らがいるからも知れん。気をつけてな」
「はい」

一方、目を覚ました。翼は窓から見えるリディアンを見て呟く。
「何か不思議な感じ…ああ、そうか。初めて任務以外で学校を休んだのか」

そのころ、憐はヘルヘイムの森の倉庫にいた。
「えっと、これと、これと、これと、これ。それに、こいつを」
憐は倉庫を漁りながらいろいろな物を取り出していく。そして、それらをある場所に持って行き設置していく。
「あとは…」
「よう。一人で何してんだ？」
忙しく動き回る憐に声をかけたものがいた。憐は動き回るのを辞

めずに話す。
「…奏。どこ行ってたんだ？」
「んー翼をしばきに」
「そうか。で、どうだった？」
「弱かった。とてつもなく」
「それをどうにかしてきたんだろ」
「まぁな、あとは翼次第」
「なるほど」
「で、何してんだ」
「決戦の準備」
「？　真正面から行かないのか？」
「真正面から行くと必ず負ける」
「なぜだ？」
「戦闘力としたらあいつらの方が上なんだよ。だから、それを覆すための聖遺物を設置してる。戦闘面以外だと俺の方が上だからな」
　その言葉に頷きながら、奏は聞く。
「なるほど。あたしは何をすればいい？」
　憐は少し悩み答える。
「なら、響を頼む。俺がいなくなって何をするかわからんからな」
「それはいいが…なんで姿隠すんだ？」
「リディアンにあいつらの仲間がいる」
「何だと！誰だ！」
「それは…まだわからない」
「そうか…」
　憐の言葉に明らかに落ち込む奏を見て憐は思う。
（わりぃな。奏。教えるわけにはいかないんだ）
「そういうわけだから、ちょっと行ってきます」
「しゃぁねぇ、いってらっしゃい」
「おう」

リディアンの放課後

「響！」
「どうしたの？未来」
「今日、一緒に遊びに行かない？」
「んー今日は駄目」
「そう。じゃまた今度ね」
「うん。じゃぁね」
　別れた響は、店に寄ってからリディアンの中にある病院に戻って行った。
「翼さん…」
　響は翼の病室の前で迷う。
（どうしよう？なんて顔をして会えばいいか。わかんない）
　そうは思っても響のポジティブシンキングは変わっていなかった。
「まっいっか、失礼します。翼さん」
　扉を開けた瞬間、驚愕の光景が飛び込んできた。
「なに…これ…」
　その光景を見た響は動揺から復帰し慌てる。
「翼さん！どこですか！翼さん！ちっ、憐さんの正体がばれたか？そのために翼さんが、それか…」
「何してるの？」
「うひゃぁ！」
　悩む響を後ろから声をかけたものがいた。
「翼さん!?」
　そう。翼である。
「翼さん！大丈夫ですか！」
「リハビリしてただけよ。それに、怪我人に大丈夫はどうかと思うのだけど？」
「だって！」
　響は荒れている病室を指指す。
「病室は荒れているし、最近はシンフォギアを狙う人もいるそうなので、翼がさらわれたのかと思って…」

そこまで、まくし立てていた響は気がついた。翼が顔を赤くして俯いていたことに。
「まさか…これが…あの…憐さんが言っていた女子力皆無の翼さんか！」
「…すまない。というか、憐も言ってたのか！」
「はい。取り合えず、片付けましょうか」
「お願い…」
そういうことなので、響は翼の病室を掃除する。すると、出るわ、出るわ。食べた後のゼリーに割れかけの栄養ドリンク、炭酸飲料、使用済のタオル、服。更には下着（未・済両方）までも。
「ロボットゼリーにドラゴンゼリー。ラビットタンクスパーリング、クロコダイルクラックボトルなんてどこに売ってるんですか？」
「知らない。入院初日にファンの人で、ペンネームが『天才物理科学者』さん『筋肉馬鹿』さん『アイドル大好き独身２９歳』さん『ヒゲおやじ』さんからの差し入れで」
「何その怪しい名前の人達。緒川さんが確認してんだろうけど。で、味はどうだったんですか？」
「どれもこれも、普通に美味しかったが、そうだな。ラビットタンクスパーリングはウサギの様な優しい小動物のような味の後に戦車のそれを壊すような激しい味が来る。わかりやすく言えばマ○チの優しい感じにモ○スターの激しい感じを混ぜて合わせた感じ。ＢＥＳＴＭＡＣＨ！という感じ」
「なるほど。なら、ドラゴンゼリーは？」
「ソーダ味に近い味なんだけど、味に抑揚がある。うーん、言いにくい」
「じゃぁ、ロボットゼリー」
「ドラゴンゼリーと違って均一な味だった。味はジンジャーエール？っぽい」
「で、割れかけのクロコダイルクラックボトル」
「ああ、それはそういうデザインなんだ、と言うのだ。そんなことをしたら割れやすくなるというのに。味は攻撃的な味。栄養ドリンクの

激しいけど、飲みやすい」
「それにな、この飲み物達何故か効果があるらしくてな。ラビットタンクスパーリングは飲んだら速さと防御力が上がるらしく、ロボットゼリーは正確さが、クロコダイルは攻撃力、ドラゴンゼリーは成長速度が上がるらしい。そして、すべてに自己治癒力が上がるらしい」
「ナニソレェ」
「二課でもお手上げだそうだ」
「マジかよ」
　そうこうしてるうちに、掃除が終わった。
「それで、なんですか？この有様」
「すまない。私は、戦闘以外は何もわからないんだ。今までは、憐や緒川さんにやってもらっていたしな」
「男の人にそこまでしてもらったら駄目でしょう」
「でも、出来ないし…」
「下着（ボソッ）」
　すると、みるみる翼の顔が赤く染まる。口をぱくぱくさせ何て言えばいいかわからないようだ。
「なるほど…そうやって誘惑してたわけだ」
「誘惑してない！」
「履いた後の下着、洗濯してもらっているのに？」
「それは…」
「……なんて羨ましい！」
「エッ？」
「私なんか、恥ずかしかったけど、タオルも付けずにお風呂に突撃したのに何もされないし、憐さんはタオル巻いてるし、目つぶってるし。それなのに翼さんときたら、必ずやらなければならない方法で、なんてエロい事を!!」
「そういうこと?!いや、確かに、そりゃ、憐が、ちょっとは、意識してくれたらなぁとか、最初は、思ってたけど、途中から、ほんとに、出来なくなちゃったから、もうそのこと気にしないようにしてたから忘れてた…」

「ハハハハ…………翼さん。ナメてます？」
「幼なじみ特権！」
「上等だゴラァ！かかって来いやぁ！」
「私の方が上！貴女がかかってきなさい！」
「「ふう」」
「貴女、最近頑張っているそうね」
「翼さんがこれまでやって来たことに比べれば全然」
「それでもよ。私がこれまでやって来たことはただの私怨。憐と奏の敵討ちのつもりだったから。ほんとに人助けのために動く貴女の方が立派よ」
「ありがとうございます」
それから、二人は他愛のない話をして盛り上がった。そんな二人を見詰める影が一つ。
「なんで、なんで、なんで？どういうこと？私より、その女の方が大事なの？私の方がこんなにも貴女のこと愛しているのに。愛しているのに。愛しているのに。愛しているのに。愛しているのに。大好きなのに。好き

好き好き好き。私の方がだーい好き。ねぇ、響」

その影の胸には心臓のように脈打ち体に根を伸ばしつづけ、黒く染まろうとする銀色の果実があった。